

ぢやあないかと云ふ外に適當な表現が無く、誰からともなく「例の會」と呼ぶ事になつてしまつた。

「例の會」の第一回は四十三年十二月十八日に、その頃三田松坂町に住んで居た自分の家で開いた。小泉岡田兩氏は子供の時から知つてゐたが、他の二人との馴染は淺かつた。けれども最初から遠慮の無い話で、大變面白かつた。小泉氏を除く他の四人は、何れも創作の野心を漏らした。松本氏はその頃既にいくつかの短篇の習作を持つて居るといふ事だつた。自分は鹽湯の二階の同人雜誌相談會以後うづうづして居るところだつたから、まだ一つも書いて見もしないのに、持つてゐる材料をみんなに話し、みんなは是非書いて見ろと勧めてくれた。一同若者らしい感激で夢中になつてしまつた。

どうかして吾々の會合の場合に、永井先生にも出席して頂く事は出来ないだらうかと誰かがいひ出した。折角文科の教場に傍聴に行つてゐても、尊敬に伴なふ多分

の遠慮から、親しく先生と話をした事は殆ど無い。永井先生のやうな方に、吾々のやうな粗野な書生の會に来て頂くのは失禮だと云ふやうな氣持があつた。なんだか先生の御機嫌を損じてしまひさうな氣ばかりして、

「来て下さいと云つたつて来て下さりはしないだらう。」

といふやうな事を自分は口にした。殊に、来て頂けるにしても場所が無い。生じつかない料理屋なんかには御招き出来ない。召上る物も氣をつけなければならぬが、そんな氣の利いた事は吾々には出来ないと思つた。正式に永井先生の教を受けてゐる松本氏は、左程心配する事は無い、喜んで来て下さるだらうと云つたが、結局其の晩はうやむやのうちに話題が外に移つてしまつた。

其の日から吾々の心持は一層緊張して、何かしでかさなうでは居られないやうな調子を帯びて來た。よく顔を合せた。逢はない時は頻りに手紙を書いた。既にいつたん過ぎてしまつたやうに思つて居た若々しい心持が完全によみがへり、以前よりも

遙かに力強く活躍し始めた。

約一週間たつた頃、小泉氏からの手紙の中に斯ういふ一節があつた。

今日塾の忘年會があつていろいろの人が演説をやつたり隠藝をやつたりした。

しかし僕の隣には永井荷風さんが居たので僕は之等に注意する事なしに済んだ。

(永井さんが僕の隣に居たのではなくて實は澤木君と僕とが永井さんの隣に坐つたのだ)僕は永井さんが僕に話し又僕が永井さんに話した片言隻語も鮮かに記憶して居る。しかし今は其の中の二つ三つ丈を書く。

來年正月の「三田文學」には「秋の別れ」が出る。萩山氏に聞くと小説みたいな詩みたいなものださうだが永井さんの口をかりれば「脚本の出來損ひ」だと云ふ。二月號には「下谷の家」が出る。これは永井さんの小供の時分——記憶といふものが始つた時分——の事を書いたもので二十五頁位になるさうです。

(永井さんのうちは旗本で幼年の永井壯吉さんがうちにある鎧冑などを見て驚いた事を書かれたのです)それから三月號には「芝山内の御靈屋の中を夜歩いて大變いゝと思つた事を書くつもりでもう半分位出來ました」さうです。

僕は「見果てぬ夢」「隅田川」「狐」が好きだと云つた。「見果てぬ夢」は餘り幼稚で少しいや味だと永井さんは云ふ。しかし僕らには未だ大變結構ですと重ねて云つたら笑つて居られた。「隅田川」と「狐」は作者自身でいゝと思つて居られるさうだ。「殊に隅田川は町寧に書きました」との事。永井さんは今日羽織袴で麥酒の少許と人いきれで蒼白い顔が微紅を呈して見えた。

來年は是非吾々の會へ來て貰はふ。永井さんは決してよくしやべる人ではないが、なつかしい話し振りだ。あの人の話しなら僕は何時間でも聞いて居る。永井さんと三四人の友達と一諸に休暇を何處かの海岸か温泉で送つたらどんなに嬉しいだらうなどと思つて見る。

その日の、小泉氏の喜びは目に見る如くあらはれて居る。甚だ羨しかった。翌年の「三田文學」に出る先生の作品について聞いた知識を、友達に分つ時のいゝ氣持は想像にあまる位である。永井先生が少しの麥酒で紅くなつた事、ふだん洋服の方が羽織袴だつた事なども、まださういふところを知らない友達に知らせたかつたに違ひ無い。

これは小泉氏ばかりでは無く、澤木氏でも、自分でも、永井先生の御話を一人で聞いた時などは、どうしてもそれを手紙で他の連中に知らせないでは氣が濟まないものであつた。知らされる時は何となく嫉妬を感じ、知らせる時は限り無く得意だつた。「例の會」の第二回目は年があけた四十四年の一月三日に開いた。澤木氏は既に「夏より秋へ」といふ小説を書始めて居た。三田四國町の下宿の二階で、訪れる度に枚數の殖えて行くのを讀ませて貰つて非常に感心し、とても自分などの及ぶところでないと思つて落膽した。聖坂の上の下宿に居た岡田氏のところに行つて見ても

出来上つた作品を机の抽出から取出して見せてくれた。「品川の海」「保田のゴリラ」などといふ短篇で、餘り感心しなかつたが、どう書き始めていゝか見當もつかない自分には、苦も無く書上げてしまつた手際が羨しかった。松本氏の如きは數十篇を自宅に持つて居ると云ふ話だつた。それで、「例の會」の席上では頻に創作の話が出て、自分も是非とも書いて見度いと更に強く思つた。

その翌日、一人で湯河原に出かけた。湯河原は澤木氏の「夏より秋へ」の舞臺なので、それに誘はれて撰んだのだ。宿に着くと直ぐに机にむかつて第一の習作の筆を執つた。「火事」と云ふ題だつた。朝から晩迄夢中になつて書いて居たが、ちつともこつが解らないので、書いては破り書いては破りしながら、一週間かゝつて約二十枚の小説を書上げた。讀返す度にあらがわかり、殊に澤木氏の「夏より秋へ」の原稿を見て敬服して居たので、それと比べてひどく悲觀した。しかし、兎に角書上げたといふ事は嬉しかつた。書上げたのだと思ふと俄に友達が戀しくなつて、その次

の日に東京に歸つた。續いて又「浴泉記」といふを書いて、兩方とも「例の會」の人に見て貰つたが、餘り好評ではなかつた。自分でもつくづく拙いと思つて居たので、此の二つの習作は破いて捨てしまつた。

「夏より秋へ」が完成したのは一月の末で、作者は直ぐに永井先生に見て貰ふのだと云つてゐた。自分の友達の中に、これ程うまい作品の書ける人間がゐやうとは思つて居なかつたので、心底から感心した。

永井先生は「夏より秋へ」を讀んで、人物は餘り上出来でないが自然描寫は大變いゝとほめて居られた。此の小説は「三田文學」第二卷四號に出たが、これよりさきに、三月號には井川滋氏の小品「逢魔時」が出た。恐らくこれが、學生の原稿で「三田文學」に採用された最初のものであらう。

何にしても「例の會」の同人澤木氏が「夏より秋へ」を發表したのは、一層吾々を夢中にした。氏は引續いて「春のおとづれ」といふ短いものを書上げ、更に又他

の小説に筆をつけて居た。「春のおとづれ」は作者自身氣に入らないと云つて發表しなかつた。もう一つの方は——何といふ題だつたか思ひ出せない——休暇を利用して湯河原に行つて書くといふので、自分も今度こそ少しは羞しくないものを書き度いと思つて同行する事になつた。

自分は「山の手の子」を書始めた。澤木氏も書きかけのものを續ける積りでゐた。同じ室に寝起きしながら、食事の時の外は一切てんでん勝手の行動を取つた。自分は氣の向いた時に行き度い處に行く。澤木氏は澤木氏で氣の向いた時に行き度い處に行く。双方から誘ふといふ事が無かつた。九日間、朝から晩迄「山の手の子」にばかりかゝり切りで、四月十二日に脱稿した。あんまり一生懸命で書いて居たので、誰とも口をきく氣にもならなかつた。宿の女中は

「水上さんて方は始終何か書いてばかりゐて、口もきかない氣味の悪い方だ。」と云つた。

澤木氏の小説も少しづつ進行して居たが、「夏より秋へ」に比べるとひどく見劣がして、結局いやになつて止めてしまつた。

「山の手の子」は東京に歸つて清書して、先づ「例の會」の人達に讀んで貰つた。全く傾向の違つて居た松本氏は、恐らく甘いもんだと思つたらうが、外の連中は大變ほめて、是非永井先生に見て頂けとおだてゝ呉れた。しかし自分では、日が経つにつれてへまな箇所ばかりが目につき、折角張つめて居た氣持が又なさけなく滅入りさうになつて來た。

「例の會」は時々開かれ、その度毎に永井先生を招待しようと思ひながら、矢張り先生と吾々の間に餘り人間の値うちが違ひ過るといふやうなおもわくが邪魔になつて事はすらすらと運ばなかつた。

五月もなかばを過ぎた或日、永井先生の時間に傍聽に行くと、文科の生徒は怠けて出て來ないので、折柄同じく傍聽に來てゐた小泉氏と二人で、先生にいろいろの

質問をした。その時の御話によると、先生の第一試作は中學五年頃に「梅曆」を眞似して書いた七五調の「春の恨」といふので、第二の習作は外國語學校時代に近所の西洋料理屋に娘が居て、それを生徒がはりに行く事實を書いた「夢日記」である。兩方とも手箱の中に納められたきりで、世の中には出なかつた。それから一年ばかり森槐南先生の門に漢詩を學び、それもいやになつて又創作を始め、廣津柳浪先生の門下生となり、柳浪先生校訂の名の下に「文藝俱樂部」に「うす衣」を出して貰つた。その前に二箇月ばかり「大和新聞」の三面記者になつた事もあつた。當時其の新聞には櫻痴、魯文、採菊、破笠、綺堂諸氏が居たさうである。

それから翌月の「三田文學」の話になると先生御自身は「浮世繪の夢」を書き、外には鷗外先生の「藤巴」馬場先生の「屈辱」小林乳木氏の小説「上京」文科一年の生徒久保田万太郎氏の「朝顔」などが出ると云ふ事であつた。その時分吾々は未だ久保田氏をよくは知らなかつた。

その時小泉氏が、

「水上君も小説を書きました。」

と云つて「山の手の子」を紹介してくれた。

「持つてゐらつしやい。拜見ませう。」

と先生は云つて下さつたが、自分は顔が赤くなつた。既に全く自信を失つて、先生に見て頂いて落第するのを怖れるばかりだつた。とても自分なんか一人前の作家にはなれないのだと氣を腐らして、「山の手の子」以後「湯の宿より」「女」「裾野」などいふ題で書きかけたものもあつたが、みんな破いて捨て、しまつた位だつた。——但し「女」といふのは、後に又書直して「うすごほり」と題し「スバル」に載せて貰つた。

五月二十四日の「例の會」に愈々永井先生を御招きして、先生の快諾を得たと松本氏から報告のあつた時の、みんなの喜びと云ふものは無かつた。しかし、其の場

所と御馳走には全く弱つてしまつた。下手な料理屋なんか持つて行くと、先生に笑はれるであらう、佛蘭西歸りの先生に、日本の西洋料理なんか差上げられないと心配する一方に、吾々の懷中も頗る豊かで無かつたのである。どうせ先生を満足させる事は出来ないのだから、いつそふだんの生地で行かうといふ事になつて、結局場所は三田の山の上でヴィツカース・ホールときまつた。ヴィツカース・ホールといふのは、昔から慶應義塾の外人教師の住む家で、近くは十數年經濟學の教授だつたヴィツカース先生の住宅となつて居た爲めに、先生の名を冠して呼んで居たのである。先生が亞米利加に歸られた後は、階上は文科の教場にあてられ、階下は教職員食堂に用ゐられ、時々は學生の會の會場に用ゐられて居た。平生は學生の食事をする所では無いのだが、二階の教室の裏手に、賣残つた「三田文學」などの積んである物置のやうなところで、文科の生徒の中の不良分子は、ライスカレイやハムエッグスに飯を添へて喰べて居た。極端に下等な料理ではあつたが、誰に遠慮も無く

夜更迄喋つて居られるのが取柄だつた。安油の臭の強い料理は如何とも爲方が無いとして、特に先生の爲めに葡萄酒を買つて来る事にしたが、さて何といふ葡萄酒がいゝかといふ相談迄随分頭を悩ましたのであつた。

當日は眞晝間はげしい雷鳴がして、時々雹のやうな雨が降つた。自分は眞先に會場に行つて居た。間も無く松本氏小泉氏の順序で集つて來た。四時頃永井先生が御出になつた。先生の佛蘭西好みの地味な洋装は、當時の吾々が夢中になつて讚美したものであつた。茂る青葉の爲めに暗く見える一室で、兼々願にかけて居た通り先生を圍んで話の出来る喜びはいつぱいだつたが、變に堅くなつて樂には口がきけなかつた。誰も何時ものお喋りにはなりにくかつた。會社勤をして居る岡田氏が遅れ走にやつて來て、がらがらした調子で話し出したのを、先生に對して慎んでくれ、ばいゝとはらはらして居たが、先生は何とも思つては居られないで、かへつて一座は賑かになつた。

給仕が食堂の用意の出來た事を知らせに來た頃は、風も無くしつとりおちついた青葉の木立に、靜に雨の降そゞ夕暮となつた。永井先生の蒼白い額が一層美しく見えた。

心にかけて葡萄酒の外に、岡田氏が持參したアプサンがあつた。先生は葡萄酒の外は飲まないと思つて、それさへ少し口をつけたばかりだつた。しかし吾々の方は葡萄酒もアプサンも麥酒もさかんに飲んで、漸く樂に口がきけるやうになつた。うっかりした事を喋つて嫌はれはしないかとびくびくして居たけれど、先生は距てなくいろんな話をして下さつた。

「泉さんの「照葉狂言」は何時の世に出してもいゝものでせう。」
とも云はれた。

「自分のものでは「狐」がいゝと思ふばかりです。」
といふ事だつた。文學美術音樂演劇——あらゆる事について自分達の感激を述べ、

先生の教を受けた。粗末な料理も、先生は平氣であがつて下さつた。

食事が済んで、又元の室に戻り、愈々さかんに喋つた。先生の御話は何から何迄面白く、吾々は下らない事迄質問に及んだ。たとへば先生はその頃髪を長くして居られたが、その型は佛蘭西のものですかといふやうな事迄訊いたものだ。驚いたのはその髪を、近頃は先生御自身でぢよきぢよき鋏を入れて居るのだといふ事だつた。

先生は十一時頃迄つきあつて下さつた。御歸りになる時、「山の手の子」を見て頂く爲めに、勇を鼓して御手渡しした。

先生の御歸りになつた後で、吾々は一層昂奮して、夜の更けるのも構はずに話合つた。天下をうかゞふ事のやうに考へて居た事が、存外失體もなく済んだといふ喜悅で、聲は自ら高くなつた。此の次には小山内先生を御招きしようと思合せた。(大

正十三年七月十日)

或日の小山内先生

一番はじめに讀んだのは「夢見草」かと思ふが、ほんとに小山内先生の作品に熱心になつたのは、明治四十年一月の「新小説」に出た「病友」を讀んでからだ。小説集「窓」「蝶」「笛」などに收められた短篇の、各々の内容の持つ韻律に従つて異なる形式の多種多様なのは驚いてしまつた。しかし其の頃は自然派にあらざれば人にあらずといふ時代だつたから、ほんとに藝術を理解する力の無い月評家連には、淺薄皮相の小手先の藝として、輕蔑虐待されて居た。斯ういふ事は現在でもある事で、作者自身さへしつかりとつかんだ思想でなく、漠然と感じた事をこけおどかしの廻りくどい文字で書くときも意味深いものゝ如く考へ、すらすらと飾らずに書いてあると淺薄だと思ふ連中が少なくない。小山内先生のやうに、はつきりつつかんだ内容に、最も適當な形式を與へて、簡潔明瞭に描く作家が、その當時味方を見出

さなかつたのは無理も無い。あんまり評判がよくないので、自分自身の批判に信用を持つて居ない自分は、手筐に秘めたる寶玉の如く、ひそかに取出して一人で楽しんで居た。

明治四十二年の暮には自由劇場の運動が起つて、小山内先生は勝れたる短篇小説家としてよりも、我國の新しい演劇運動の第一人者として世の崇敬の的となつた。

數箇月後、永井荷風先生と共に三田の文科の教授として、近代劇に關する講義を受持たれた。永井先生の教室に傍聽に行く事と、小山内先生の教室に傍聽に行く事は、當時の自分には何よりの感激だつた。

度々劇場で遠見に見たよりも一層近まさりする秀麗な先生の顔を見ながら、自分は變な事を考へて居た。それはついその頃、赤坂の若い藝者が、先生の下宿して居られる佃島に、渡船で通ふといふ艷種を新聞で見た爲である。我が小山内先生を、むざむざ藝者にとられてしまつたやうなやきもちと、斯う迄眉目秀麗では、渡船で

通ふのも尤もだといふ同情とがこんがらかつて居た。

最初の講義はイブセンだつた。英譯本を用ゐて、先生が朗讀し、且翻譯して聞かせ、その間に批評に及ぶといふやり方で、第一には *Chloé* が選定された。小泉信三氏と共に、自分は缺かさず出席した。

此の教室で顔を合せる松本泰氏が、小山内先生の小説の愛讀者だといふ事を發見した。後に久保田万太郎氏が、松本氏に勝る熱心家である事を知つて、力強い味方を得た事を喜んだ。

先生は鼻が悪いので、大きい聲で本を讀んで居るうちに、聲を出すのが樂で無いやうに見える事があつた。鼻が詰つて居るので、發音にも著しい癖があるやうに聞えた。その鼻の詰つて居るといふ事が、先生のきれいな容貌に對して如何にも似居はしからぬ事に思はれたのだ。しかし其の翻譯は實にうまかつた。筆記すれば、そのまま印刷に廻しても差支へ無さうなものであつた。今になつて愈々さう思ふの

だが、外國の戯曲の翻譯では、小山内先生の右に出る者は一人も無い。「夜の宿」の如きは、名譯中の名譯である。

それにも拘らず、當時の文科の學生といふものは實に怠け者ばかりだつた。傍聽生の小泉氏や自分の方が、どの位熱心だつたかわからない。

此の講義に出席したために、自分の芝居を見る眼は正しい方向に向けられるやうになつた。東西の戯曲を讀んでも、その眞の價值が稍わかるやうになつた。

第二學期が始つた。その年は九月から十月にかけて雨が多かつた。十月のなかばの或日、降續いた雨が止んで、ちぎれ雲の間からひそかに青空の見える日であつた。例の通り文科の教場に行くと、生徒は誰も居ないで小山内先生が一人で窓の硝子に額をつけるやうにして運動場の方を見て居た。外では、稻荷山の下に澤山の生徒が勢揃ひして、手に手に紫の小旗を振りながら、これから行はれる市俄古大學との野球試合の應援の練習をしてゐるところだつた。

「今日はベース・ボールがあるんですか。」

自分の足音に振返つて、太い稍かれた聲で聞かれた。兼々先生には、芝居についていろいろ教を受け度いと思ひながら、引込思案ばかりして、ついぞその機會を得なかつたので、これが直接先生から頂いた第一の言葉だつた。

網町の運動場で、市俄古大學との野球試合があるのだと答へると、

「私も一高時代にはよく見たものです。守山がピッチャアをやつて居た黄金時代です。」

といひながら窓際を離れて教壇に上られたが、外の生徒の顔が見えないので、

「今日は貴方一人ですか。」と訊かれた。その調子には、自分を先生の課目を正當に學んでゐる文科の生徒だと思つて居られるところがあつた。何時の時間にも缺かさず出席して居るので、さう思はれたのも無理は無い。

「先生の時間には何時も出て居ますが、私は文科の生徒ではありません。理財科の生徒なのです。」

「あゝさうですか、あの何時も来るもう一人の人は先生なんださうですねえ。」

と云ふのは自分と並んで傍聴して居る小泉氏の事であつた。どうしたのか、その小泉氏も其の日はやつて来なかつた。

「私も實は醫者にされそなたなのですが、たうとうこんなものになつてしまひました。おかげで親類にはみんな見放されてしまひました。」

何時もの鼻の詰つた聲で云はれるのが、ひどく感傷的に聞えた。自分にはそれがひどくなつかしかつた。

その後知つたのだが、先生は時々對談中に、ひどく感傷的な調子になつたり、時にはさほどに思はれない事にも激越な口調で話される事がある。

「しかし今では醫者になればよかつたと思ひます。一種の反抗心もありませうが、

文學者と云はれるのがいやです。けれども今更何になる事も出来ません。」

それは先生の心に浮んだ其の時限りの感慨であつたらうが、當時の自分はひどく悲痛な言葉として聞いた。「笛」の序文を読んだ時の心持などを想ひ合せてみた。さういふ先生の心の中の事を打あけられたのは、自分が信頼されて居るのだと云ふやうな、まるつきり根據の無い喜びに感激した。

遂に生徒は誰も出て来なかつた。自分は始めて先生と口をきき、しかもたつた一人で先生を占領してしまつた喜びで胸がわくわくして居た。外の生徒なんか一人も来ない方がいゝと思つて居た。

自分は一生懸命で、一言でも多く先生の言葉を聞き度いと思つて、自由劇場の事を訊いたり、先生の短篇小説を愛讀して居る事などを話した。「ヂブラルタルの貝」「十三年」などの名をあげて、就中愛誦するものであるとも云つた。づつと以前「夢見草」を始めて手にした時は、先生の名前をコヤマウチと讀んでゐた事なども白状

した。

「東京では珍しい名前ですが、青森の方に行くと言山あるんです。」

と云つて。先生が其地方に身よりの人をたづねて行かれた時の御話があつた。それは小説の中にも出て居たが、言葉の通じなかつた事を面白く話して下さつた。

フレー

フレー

フレー

ケーオー

と應援隊はしきりに聲を張上げてゐた。

「お氣の毒ですが今日はやめにします。」

と云つて遂に先生は教室を出て行かれた。少し猫背で、著しい歩き癖のある先生の後から、自分も直ぐにくつついて行つた。うちに歸るには反對の裏門の方に行く可きであるが、くつついて行けるところ迄行きたかつたのだ。

品川の海を見晴す坂道を下りながら、先生は今日これから横濱に外國人の旅役者の芝居を見に行くのだと云つた居られた。バアナアド・シヨオやオスカア・ワイル

ドの戯曲もレバアトツイの中にある。昨日も、一昨日も行つたといふ話をされた。

「私もおともしてよござんすか。」

といひたくて堪らなかつたが差控へた。さぞかしうるさい奴だと思はれるだらうと考へたのだ。

三田の通で先生に別れた。薄色の背廣の背中をまあるくして、小脇に本とステッキを抱へて行く天鷲絨の帽子的見えなくなる迄見送つた。(大正十三年七月十一日)

築地小劇場に就て

貝殻追放

今でも芝居を見る興味を持つて居るのか、或は失つてしまつたのか、久しい間自分分は考へ迷つて居た。やがて十年、進んで劇場に足を踏入れた事は殆ど無い。年に幾度と數へる位、それも誰かに誘はれて行くだけの事で、劇場の入口にかゝり、座席におちつく迄、まるつきり氣が進まない。よせばよかつたと思ふのである。その癖幕があくと、存外面白く思ふ事もある。

長つたらしい通俗小説を無理に脚色し、役者はすつかり型に墮した所謂新派の芝居や、いくら脚本は目新しくても、あんまり下手な素人役者が粗末に取扱つて滅茶々にしてしまふ所謂新劇團丈は、ついで面白いと思つた事も無いが、歌舞伎の面白さは、ひと頃のべつに芝居通ひをして居た時代よりも、深く正しくわかるやうになつたらしく、これを亡びるものと惜氣も無くあきらめたり、亡びさせてしまはふ

とする人間を見ると腹立しく感じる位である。但し今日の如く、歌舞伎を味ふ丈の修行を積まない人間が多くては、乍残念やがて亡びる運命は免れないとは自分も考へて居る。それで一層愛着が深いのかもしれないが、それとてもこつちから進んで見に行く気にはならない。見て面白いと思ふ事と、せつつくやうに見度いと思ふものとは自ら異なるのである。

自由な時間の持合せの少ないといふ事も、芝居に遠ざからせる有力な原因である。毎朝九時から四時半か五時迄は、相當勤勉なる勤人として働いて居るので、外の事に費し得る時間は、日曜祭日の外には夜分の數時間しかない。此の少ない時間を無駄に使ひ度くないと思ふ結果、成る可くいろんな事に手を出さず、いろんな場所に顔を出さないやうに用心する事になる。平生勤先から歸ると、犬と金魚の世話をしてから湯に入り、少量の晩酌で食事を済ませると、あとは本を読み物を書く事を第一とし、徹夜をする事もあれば、二時三時迄机にむかつて居る事もある。しかも翌

日は又會社に出て、人一倍忙しい目を見なければならぬ。

不斷の努力をして居るので、たまには完全なる休息を求め。さういふ時には酒を飲む。時としては話の面白い友達と一緒に望ましいが、堂々たる料理屋や待合の酒はちつともうまくない。バーやカフェと稱するところは、客も給仕も行儀が悪く、騒々しくて休息にならないし、且飲食物が亂暴粗雑なので行く氣にならない。多くは小料理屋の椽臺に腰かけて、酒樽と相對しつゝ、自分でも氣がとがめる程の長尻で、手酌の盃を楽しむのである。つまり、机にむかつて本を読むか筆をとるか、飲屋で、盃をふくんで一人でとろんとして居るか、此のふた道以外には成る可く時間を割き度くないのだ。芝居を見る氣にならないのもこの爲めであらう。机を離れさせ、盃を捨させるだけの誘引力を、芝居が持つて居ないとも云へるであらう。ところが最近になつて、出物の變るのが待遠しく思はれる程、芝居に行くのが楽しみになつた。いふ迄もなく、築地小劇場である。

雑誌「築地小劇場」の創刊號を見ると、小山内さんが「築地小劇場建設まで」といふものを書いて居られる。それによると、小山内土方兩氏が小劇場を建てる相談をしたのは今年の正月の三日だと云ふ事である。恰も暮から京都へ遊びに行つてゐた自分は、その日偶然大阪天王寺の小山内さんの御宅を訪問して、此の計畫のある事を知つた。勿論詳しい事は聞いたわけでは無く、未だ發表されない事を立入つて訊く可きでも無いと考へたのであるが、その時自分は、何日迄もさかんなる熱情をもつて、常に新しい何事かに熱中する小山内さんの若々しさに驚いた。

今更いふ迄も無く、劇文學者として、演出者として、小山内さんは第一人者である。其の經歷からいつても、地位からいつても、年配からいつても、大概の人の根性ならば、今迄の自分の爲た仕事を守る地位にこびりついて、危険を冒してまでも新しい途に進まうとはしないであらう。なかには、新しいものをうけ入れるだけの心の柔軟性を失ひ切つてしまふ者も少なくないであらう。自分の如く、未だ一人前

の仕事は何も爲て居ない者さへ、ともすればさういふ傾向を免れないのだ。それなのに小山内さんは、子供の如き生一本の感激をもつて、自分自身眞先に新しい仕事に打込んでしまふ。これあるが爲に自由劇場の大業を成し遂げたのであらう。これあるが爲めに活動寫眞の改革と映畫劇の俳優の養成に全力を盡す氣になつて、幻滅の苦さを味はひもしたのであらう。これあるが爲めに昔は基督教に熱烈なる信仰を持ち中途は何處かの行者に歸依したり、後には大本教に凝つたりしたのであらう。それはいゝ時もあれば、悪い時もある。しかし常に一生懸命である。さうしてこれあるが爲めに今度は築地小劇場に一切を捧げんとするのであらう。

いざ一つの事を始めようといふ時の小山内さんの意氣込は、はたで見て居る者からははらする程、昨日迄のすべてを振捨てて、まつしぐらに突進する。その上に、今度は斯ういふ事に全力を盡すといふ事を、自分自身にも強く思ひ知らせ、又世間にもはつきりと知らせなくては氣が濟まないらしい。たとへば松竹と絶縁するとす

れば、今後再び營利的の劇場には斷然關係しないと宣言しなくては納まらぬ。大概の人なら、營利的の劇場でも、何時か又氣に入つたのがあれば手をつなぐ事もあるだらうと考へるところを、恰も子供が新しく玩具を貰つた時のやうな熱情をもつて、古い方は紙屑の如く捨てて、新しい方をしつかりと兩手でつかんでしまふ。さうして、その態度を宣言する事によつて、ぬきさしならぬ地位に自分を置き、それが爲めに愈々昂奮して、益々覺悟を定める事になるのである。小山内さんの秀麗なる面上に感激の血の色の浮ぶのはさういふ時である。今度も、或る講演會の壇上で宣言された時、小劇場は當分外國の物ばかりを上演して日本の物はやらない積りである、日本の物を演出する興味を持たないといふ意味の事を云はれて、職業的意識の強い人々を怒らせたといふ噂がある。その結果が小劇場に對する批評に崇りをなして居るといふ噂もある。自分は其の席に居なかつたので果して其の宣言が腹の立つやうな調子のものであつたかどうか知らないが、此の我劇文學界の大先達の苦言

として、現在の戯曲作家は甘受してもよささうに思はれるのである。いづれにしても吾々のやうな坐つたらば坐つたきりで動かないやうな態度の人間には思ひも及ばない。あぶなつかしくて冷々するが、危いとか危くないとか云ふ引込思案に昵まらずに、熱情の燃るがまゝに燃えしめる生一本の心は、尊ぶ可く美む可きである。小山内さんこそは、此國には珍しい永久の子供であらう。東方のピエタ・パンであらう。扱て、築地小劇場の事業は想像したよりも速かに運んだ。時々上京される小山内さんや、たまに逢ふ淺利鶴雄さんから、敷地が定まり、建築が始まり、俳優が集まり、稽古に着手した事を聞く度に、其の計畫の勢のいゝ遂行力に感心し、又成功を祈るのであつたが、同時に又多大の心配をいだいて居た。それは小劇場の同人諸氏が、あまりに昂奮し過ぎて居る事を第一に懸念するのであつた。

今でも自分は築地小劇場の財政組織を知らないのだが、此の劇場の將來について、何よりも心配なのは經濟問題だと思つて居る。たぶん同人の一個人の家産を資源と

して居るのであらうと想像するが、個人の財力には限りがある。萬一その爲めにつまづくとするれば甚だ口惜い。考へ方によつては、たとへ間も無く亡びても、その時迄に残した効績だけでも充分意義があると云へるであらうが、自分は築地小劇場をさういふものとは考へて居ない。築地小劇場は、自由劇場とは違ふのである。自由劇場は、我國に於ける新劇運動の中で、いゝ影響を残したたつた一つのものだと云つてもいい。外のものは演劇を素人わかりのいゝものにし、やがては澤正に迄も墮落して行つた位で、演劇運動といふよりも、素人が興行界に割つてはいる興行運動に過ぎなかつた感がある。小山内氏と傳統的修練のある既成俳優との協力になる自由劇場の効績の最も大なるものは、新しい戯曲上演の正確なる手本を示したところにある。

しかし、築地小劇場は、今直に手本を見せるのを目的とはしてゐないだらうと思ふ。或は想像に過ぎないかもしれないが、此の劇場は藝術としての演劇に關する一

切の事を、努力によつて新しく生んで行く事業だと考へる。役者も其處で生み育てゝ行かなければならない。見物も其處で教育して行かなければならない。營利を離れ、又低級なる娛樂としての演劇とは全然立場を異にする純藝術的の芝居の存在を要求するのだと考へる。手本を見せるのでもない、自己満足の研究でもない、當然今日迄にあるべくして未だ無い劇場藝術の創設を目的とするものであらう。從而其の存續が短かければ、此の劇場の發生の意義は少ないのである。長い年月を費して、始めて目的を達す可き性質のものである。どんな事があつても、此の劇場をつぶしてはならないのである。

今日迄の新劇運動は、何れも自分達の劇場を持つてゐないのが弱味だつたと云はれて居る。しかし、一面から考へると、劇場を持つて居る事が弱味になる場合もあり得る。鞏固なる財政の基礎がなければ、劇場を持つて居る爲めに却つて共倒れとなる事もあるであらう。劇場を持つてゐる以上は、その劇場が經濟上獨立して行く

事が出来なければ駄目だ。自分は決して儲ける事を主義として貰ひ度くない。けれども、損をしつゞけては立行かない事は明白である。小山内さんにしても、経営部主任の淺利さんにしても、藝術的熱情にかられて他を顧みないやうな口吻を漏らされるので、真正直に心配してゐるのである。小山内さんの影響を多分に受けて居る若き好男子の経営部主任に對して、自分は言葉を強くする爲めに、寧ろ儲ける積りで經營するのがほんとうだと云つた事もある。

それは第三者の老婆心で、恐らくは小劇場の經營には何の差支も無い資源があるのであらう。別段何の心配もないらしく、計畫はぐんぐんと進んで行つた。舞臺の諸設備に新規のものがあると聞いて、一度見學し度いと思ひながら、つい機會が無く過ぎてきた。

たぶん五月の末だつたと思ふ。原稿を書上げた疲勞休めに、銀座の岡田で一人盃を愛して居るところに、淺利さんと築地小劇場の印刷を引受けて居る名鹽さんがや

つて來た。淺利さんの話で小山内さんの上京して居られる事を知つた。逢ひ度かつた。何處に行けば逢へるかと訊くと、小石川の土方さんのところに泊つて居ると云ふ事だつた。さういふ淺利さんも月を越えて土方邸に寝泊りしてゐて、自宅に歸る暇も無い程忙しく、二週日の後には開場の運びとなる可き小劇場の事務に没頭して居るのだといふ事であつた。自分は其の話を聞いて、すべての人が餘りに昂奮し過ぎてゐはしないかを愈々あやぶんだ。

此の種の眞面目な運動は、今日の我國の荒んだ人心にはうけ入れられないものである。その人々は無闇に殺伐な芝居や、惡どい滑稽か卑猥な筋立のものを喜ぶばかりであらう。又多くの芝居好は、演劇其のものよりも役者其の人を見に行くのだから、無名の俳優でやつて行く外に無い小劇場は、何處から考へても、當分不入を覺悟しなければならぬ。持久戦の苦痛に堪へなければならぬのである。開場の差迫つてゐる場合、深更迄事務をとらなければ間に合はないのではあらうけれど、少

なくともさう云ふ例外の事が、いかにも愉快な事であるらしい口吻を聞いては心もとなく思はれるのであつた。小山内さんが九等俳優とかの鑑札を受け、萬一仕出の足りない時は自ら舞臺を踏む覺悟だといふ事も、土方夫人が衣裳方で、これ亦深更迄受持に忙殺されて居るといふ事も、すべてが餘りに「面白さう」で頼りなく考へられた。

淺利さんは食事を済ませて、これから土方さんのところへ行くと云ふので、自分も同行する事になつた。

土方さんのところでは、應接間を小劇場創立事務所として、若い書生さんが數人働いて居た。二階では稽古が始まるところだつた。その稽古を見てもいゝと云はれたけれど、突然の侵入者が道場の空氣を亂す事を恐れて、一先づ階下に下りて事務所の一隅で待つ事にした。

稽古の濟んだのは十二時近かつた。めいめいはげしい稽古の後で、動作は活潑に、

聲音は一段高く、まだ呼吸のはずむやうな様子で、階段を踏鳴らして歸つて行つた。自分は、小山内土方兩氏と、午前一時頃迄話して、自分も昂奮しさうな氣持になつた。兩氏とも、如何にも生甲斐を感じて居るらしく、活氣が漲つてゐた。隣室では、土方夫人が衣裳の作制にいそしんで居る。いかにも面白さうであつた。

その當座、自分は約十年前に見たボストンの Toy Theatre の事を頻に聯想した。未だ小劇場の建築も見ず、どういふ風に經營されるのか、如何いふ演出を見せて呉れるのかも知らず、殊に兩劇場の成立ちも目的も全く違ふのに、それを聯想したのは、兩方が小劇場だからといふのでは無く、土方邸の一夜の光景の中に、全員がいかに面白さうに活動してゐた事に原因すると思ふ。

自分の記憶は既に頼りにならないが、トイ・セアタアはボストンのチアルス・リザを距る事餘り遠くないところにあつた。倉庫のやうな煉瓦造の一棟をいくつかにしきつた中の一つで、全く物置か小賣店の爲めに建てられたものゝやうであつた。

劇場らしい裝飾も無く、客席は土間ばかりで、椅子の數も百五十とは無かつたであらう。ボストンの有志によつて維持されてゐるもので、其の頃たしか創立後三年目位だつた。もつと大きい小屋を建てるに云ふ噂だつたから、今ではもつと立派なものになつて居るか、或はもう存在してゐないか、知らない。自分が其處で見たのは Bernard Shaw の Getting Married であつた。ポオドヰイルと喜歌劇に惱まされ切つて居た自分は大變面白かつたが、演出にも特別の苦心が拂はれてゐるとも見えず、登場者は素人ばかりで、嚴格にいへば餘興以上のものでは無かつた。それでも稽古は積んでゐると見えて、シヨオ一流の饒舌芝居を、誰しも正確に暗誦し、且全員の統一がよく保たれて居た。

一致團結して芝居をして居るといふあたりまへのことさへ營利主義の芝居には望み難いので、かういふ素人の團躰も、これを特徴として存在の價値があるわけだ。みんなが一致して誰一人ぬきんでゝ頭を出さうとしずに、楽しみいそしむとこ

ろが、土方邸で感じた小劇場同人の働き振と聯想の鎖がつながつた所以であらう。トイ・セアタアを見た時の心地よさと同じく、土方邸の光景は羨しい程面白さうに思はれた。其處に集つてゐた人々が、芝居をすると云ふ事丈にはり切つた精神を凝らし、感激に昂奮してゐる有様は、傍觀者の自分をも感動させた。

乍然、築地小劇場は、金持が寄集つて、氣の向いた時に芝居をするトイ・セアタアとは違ふ。充分の維持費を持つてゐて、時たま公演を催すのでは無い。多くの營利芝居と並行して、一週間に五日づゝ殆ど休み無くやつて行くのである。人々の感激が同じ強度を持つて年を越え、又年を越えて行く事は望む可くして行はれ難い事であらう。役者を見るのが目的の見物は、恐らくは小劇場を顧みないであらう。眞白く塗つたい、男の役者でなければ満足しない女の見物——それが芝居の最も有力なる後援者か——も集まるまい。たぶん定連として通し切符の割引を喜ぶ者は小數の専門的研究家と、心懸のいゝ學生に過ぎまい。小山内さんが夢みて居る民衆は、

役者の神様や大統領に随喜し、又一刀の下に五人十人ばつたばつた斬倒される途法もない立廻に安直なる聲援を興ふるに忙しいであらう。さういふ實際にぶつかつた時、果して此の純粹なる歡喜と感激を持續けて行く事が出来るかどうか、非常なる覺悟がなければ、異常なる意力が無ければ、それは不可能である。遊戯は遊戯である限り緊張した心持で遂行する事が出来るが、それが勞働となつた暁には苦痛を伴ふ。藝術の魔酔の覺め際に、あらゆる不愉快な實際問題がひしひしと迫つて來るであらう。

トイ・セアタアの出資者の大立物某夫人は肥太過る體軀の持主で、最も拙劣でありながら、しかも人は名だたる金満家の夫人が舞臺に立つといふ事丈で満足し、社交界のよき話材となつたと云ふ事である。土方夫人が手づから衣裳を作ると云ふ事も、今では未だ社交界の噂としては絶好のものであらうし、夫人自身にも遊戯に近い興味であらうと思ふが、やがてそれは苦痛を伴ふ時が來るものと覺悟しなければ

ならない。小山内さんでも土方さんでも、その他同人の人達も、永續とともに勞苦の増す事は逃れられない。その勞苦の時代が來て、始めて此の事業は深く根を下す事が出来るのだ。その時になつて、一層力を出す事が出来れば、吾々見物の喜びは之に過ぎるものがない。決して、築地小劇場をして、單に營利主義の劇場に對する清涼劑で終らせてはならないのである。若しそんな事ならば、常設の劇場を設立する必要が失はれてしまふ。

愈々築地小劇場が開場してから、自分はその公演を缺かさず見てゐる。茲では劇評には及ばない積りであるが、第一回よりも第二回がよく、第二回よりも第三回がよかつた。今後自分の好みとしては、近代劇の古典イブセンに始まつて、ストリンドベルヒ、ハウプトマンの如き、既に記念塔を建設した作家のものをやつて貰ひ度い。大物に手をかける事を先にして貰ひ度いといふのは變かもしれないが、此の小劇場に集まる若い熱心なる見物に、近代劇を正解せしむる爲めには、どうしてもイ

ブセンから出發しなければならぬ。實際問題としては役者が足りないだらうし、又他面には最新歸朝者の土方さんが歐羅巴で見て來た物の印象のうすらがないうちに次々上演しようといふ事もあるであらうが、少くとも畫期的の戯曲の演出を試み、小山内さんが演出の興味無しと宣言した此の頃の我國の戯曲が、いたづらに樂な仕事を求めて、西洋の小説戯曲を日本化したものや、昔の物語や語物や、さては謠曲や小話に材料をとつて、容易に戯曲を組立てるブラック時代に、莊嚴なる大殿堂を舞臺の上に築いて貰ひ度い。

不幸にして、一回は一回と、自分は見物の數が減つて行くやうに思ふ。自分の心配した事が早くも小劇場の内外に迫つて來たのではないのであらうか、ロオマン・ロオランの「狼」、カレル・チャペックの「人造人間」の如き勝れたる演出にもかゝらず、之を味ひ見る人の數は多くない。それが自分の杞憂に過ぎない事を祈りながら、自分が上に述べたやうな心配は、どうしても胸を去らない。

さもあらばあれ、自分一個としては、築地小劇場の出現によつて、芝居研究の熱が再燃し、兼々計畫を立て、又試作もしてみた戯曲創作の野望も一層強くなつて來た。築地小劇場へ行く事は、本を読み、書きものをし、盃を手にする事の外に、惜みなく尊い時間を奮ふものとなつた。(大正十三年七月二十三日)

青山の家

貝殻追放

三六

足掛三年、大阪で下宿住居をして居たが、大正八年の暮に東京へ歸ると同時に、赤阪氷川町にひとりものゝ新居を構へた。それが自分の始めて持った所帯だつた。

間もなく三田の福澤さんの持家を拜借して引越し、其處にはまる二年居た。慶應義塾の稻荷山の有名な大銀杏の下で、家は自分などには過ぎて居たし、御大家の大家さんなので何の面倒も無く、充分満足すべきであつたが、致命的の缺點は、往來のやかましい事だつた。又その一條の往來程、車馬の交通の頻繁なところも少ないであらう。南の方には聖坂があり、北の方には綱坂があり、何れもかなりの坂だから、安きを擇ぶものは、少々遠廻りしても我家の前の一條を利用するのであつた。荷馬車や自動車を通ると、家は土臺からぐらぐらし、戸障子はがたがた鳴るのであつた。殊に閉口したのは、目黒から出て來るこえたごやが、まだ暗いうちから重た

い車を曳いて通るのだつた。書き物をして夜を更かし、やうやく熟睡したと思ふと、枕の下にごとんごとんと荷馬車の重たさが震動して来るのはやりきれなかつた。

何處か静かなところに引越し度いといふ願は、一日一日強くなつたが、それでも思ふに任せないで、二年二箇月動かなかつた。

たまたま岡田三郎助先生から、青山南町二丁目に住んで居るおしりあひの方が引越す事になつたから、その後にはいつてはどうだと云ふ御話があつた。あんないい借家はありませんといふ先生の折紙つきだつた。

先方の御都合をきいて下さつて、岡田夫人と大隅爲三さんが案内役で、その又と無いと云ふ家を見に行つた。青山一丁目と三丁目の電車停留場の恰度間にある細い道を、墓地の近く迄入つた静なところで、垣根の中の庭も廣く、春先の樹木の緑が明るく柔かに輝いて居るのが、先づ心を引いた。玄關と應接間は洋風になつて居て、其の外に六室あるから、自分のやうな小さい所帯には充分だつた。家を取巻いてか

なり廣い庭もあり、庭木の數も種類も多く、それで家賃も意外に安かつたので、自分には心から感謝した。確に又とない借家だと思つた。

家主は陸軍の退役將校で、今は郷里——關西の某市の市長をして居る。差配人は昔馬丁をしてゐた男で、現在は此の近くで米屋をしてゐるといふ話だつた。

岡田さんのおしりあひで、大隅さんの友達なる此の家の借主は病氣入院中で、その爲に此處を引拂ふのだといふ事だつた。病氣は腦病で、時々狂暴になると、奥さんの身持を疑つて折檻し、時には全く靜穩になつて、太陽崇拜の長論文を書く。年中狂つて居るわけでは無く、常態を永く續けて、關係して居る會社の事務も間違無く見る事も出来るし、つい先頃株主總會を召集して、滞り無く重役の責任を果した。病院に入つて居ても、極めておとなしい時もあるが、留守宅の奥さんの行狀が氣になつて、屢々逃走を企てる。平生は嫉妬も起さず、太陽を崇拜する事も無いが、いつたん狂ひ出すと、必ず奥さんの貞節を疑ひ、日輪宗に心を凝らす。そして、奥さ

んの不行跡の相手だと想像するのは、幼少の時から親友である。しかし、如何に気が狂つて居ても、其の友達が見舞に來れば心から喜んで歓迎し、決してまをとこだと疑ふやうなけふりは見せ無い。たゞ奥さんにむかつてだけ、あくまでも不義を働いて居るに相違ないと云つて、殺してしまふとか、髪を切つてしまふとかたけりたつのださうである。ほんとに殺されるかと思つた事も御座いましたといふ奥さん御自身の話だつた。

いづれ引越がきまつたら知らせて貰ふ事にして、おいとました。玄關のところで、尻尾を切られた茶色のセツタアが遊んでゐた。

その年は事の多い年だつた。家内の里の母親と妹が正月からチブスに罹つて慶應病院に入院し、一時はどうかと心配する程の容體だつた。いくらか病氣が輕かつたのか、若い者は回復力が旺盛なのか、娘の方は三月の始に退院したが、母親の方はなかなか先が見えない。そのうちに家内も病氣で入院する事になり、くさくさする

事が重なつて來た。

家庭といふものに深い愛着を持たず、宿屋住居を理想とする自分は、所帯の面倒に閉口した。若しも充分に金を持つ身になつたら、帝國ホテルを永住の場所にし度いと、到現實不可能な事を夢想しながら、月末の心配になる其日々々を送つて居た。其處に病院といふ少なからぬ出費を要するものが現はれたので、何とかして収入の途を開かなければならなくなつた。しかし自分には、文を賣つて錢に替へる外には方法が無いので、兼々勸説を受けて居た大阪毎日新聞に、長編小説を寄せる事に決心した。それには一日も早く閑靜な家に引越し度いと願つてゐた。

青山の家を見に行つてから三週間ばかりたつて、愈々その家があくといふ知らせを受取つた。直ぐに出かけて行つたが、もう引越は済んだ後で、門の潜もあかなかつた。御用の方は左記へと書いてある差配人のところへ行くと、亭主は留守だつたが、かみさんと娘が店先で働いてゐた。前の借主から紹介して置いて貰つたので、

話はわけ無くきまつた。たゞ先方が條件としていひ出したのは、家賃を今迄よりも十圓上げる事と、家主の市長さんの任期が來年でおしまひになり、再選されば結構だけれど、萬一落選する場合には歸京して此の家に住む筈だから、その時はたちどころにあけ渡す事と、主人が住むとすればすつかり手を入れる積りだから、それ迄一時的の修繕だの、疊替だのは一切しない事の三つだつた。自分は市長さんの再選を祈りながら、それらの條件を承諾した。

既に一度拜見したから、又見る必要は無いと云つたけれど、随分古い家で、いざ住んで見てからこんな筈では無かつたと思ふ事も多からうから、もう一ぺん篤と檢分して呉れといふ筋の通つた申分なので、娘に案内して貰ふ事にした。二十五六にもならうかと思はれる银杏返の娘は、大層言葉が叮嚀で、家の古い事を繰返し、決して満足を與へる値うちの無いものだといふのが、甚だ謙讓で、母親といひ娘といひ、至極く物のわかつた人間に見えた。もう御亭主があるかもしれないが、あるに

しても無いにしても、おとなしい男を連合ひにしてやり度い氣がした。

庭の櫻の盛は過ぎて、家の屋根にも、往來にも、眞白に花が散つてゐた。門をあけて、臺所口から中に入ると、閉じ込めた空家の蒸れた空氣が氣持悪く、淫蕩な重味を含んで顔を打つた。里見菫さんの「彼と小娘」といふ小説に、かういふ場面の肉慾的な心持が巧妙に描かれてあつたが、たつた一枚あけた雨戸のところから入つて來る光線で、異常な感覺的な景色が展開されるものであつた。自分は變に不機嫌になつて、薄暗い古家の中を、慇懃な言葉でよく喋る女の後から、黙々として歩いて廻つた。

四月十七日に引越す事になつた。氷川町以來忠勤をつくし、家事一切の切盛をする感謝すべき女中が采配を振り、出入の米屋や酒屋が手傳つて呉れて、騒々しい三田から靜かな青山に移つた。殊に米屋は、どんなに遠方に越しても、必ず今迄通り出入させてくれと云つて、一倍熱心に助勢した。

引越したての落つかない心持ではあつたが、家の外の物音に煩はされない静けさが、心を豊かにしてくれさうに思はれた。かういふところでなら長編小説は急ち出来上るだらうと考へながら、第一の夜を勝手な想像に任せて、楽しみが多かつた。

曉方、家内の兄が、未だ開けない門扉を叩いて、家内の様子が變だといふ知らせを持つて來た。直ぐに病院にかけつけると、その時はそれ程でも無かつたが、間もなく容體が變つて、苦痛の外には何事も辨へない状態に陥つてしまつた。一時間、二時間——何時迄も險惡な容體のつゞくのを、たゞ醫者頼みにして見守つて居る自分の苦痛といふものは無かつた。恐らくもう助かるまいと思つた。何等の表情もあらはさず、平然として人間の生命を取扱ふ醫者を憎んだ。此の日は今日迄の最大悪日だつた。かういふ事が起るとも知らずに、昨日引越を行つたといふ事が、ひどく間拔に感じられた。

幸にして家内は命をとりとめたが、五月の中旬迄病院の御厄介になり、漸く退院

して、當人の留守中に引越した家に歸つて來たが、その月のうちに又入院し夏のさかり迄ひつかゝつてしまつた。長編小説執筆の必要に迫られながら、あんまり事が多いので、おちついて筆を執る事はなかなか許されなかつた。

家内の命が大丈夫だと見極めがついて、始めて新しい住居を、ゆつくりと認める事が出来るやうになつた。新しい住居といふけれど、それは自分にとつて新しいので、家そのものは非常に古いものだつた。木造の西洋間は疊を敷けば十二枚は確かに入る廣さで、此處に自分の財産——と云つても決して珍しいものも高價なものも無いのだが、敷だけは夥しい本を納めた。次の八疊は食事をするところにした。椽傳ひに離室があつて、其處で勉強する積であつたが、いざ机を据えて見ると、西日が強くて到底辛抱出来なかつた。庭には櫻の大樹が二本あつて、落花は土にへばりついて、永い間残つて居た。枇杷、百日紅、松、檜葉、楓、合歡木、海棠、八手、山茶花、どうだん、躑躅などのかなり立派なものがあつた。その外に、花壇には美事

な薔薇が匂ひ、椽先には睡蓮の鉢の沈んで居る大きな瓶が四個並んで居た。月のいゝ晩にその水に影の碎けるのがいゝ氣持だつた。

しかし、此の薔薇と睡蓮は、借家についたものでは無く、先のあるじの苦心して育てたもので、引越先に空地が無いから、暫時預つて貰ひ度いと、奥さんから依頼を受けた並ならぬ物であつた。岡田先生の鑑定では、三株の薔薇の中で、一株は餘程勝れたもので、睡蓮の方は花が咲いてみなければわからないけれど、多分優良品だらうといふ事だつた。

さう聞くと、それを預つて居るのが心配になつて來た。何時引取つて呉れるかわからないのだから、それ迄に枯れるやうな事があると申譯が無い。虫のつき易い薔薇の手入などは、自分のやうに忙しい人間には到底出來ない。殊に此花を愛した人は、今氣が狂つて脳病院に入れられながら、隙をねらつては逃亡しようとして居るのだ。狂人の一圖におもひつめた熱愛は、その妻と同じ程にも此の花に執着を持つ

て居るかもしれない。枯れる枯れないは別として、單に預つてゐる丈でも不氣味に思はれる。作家の想像は、美しい妻に絶間無く嫉妬し、又睡蓮に異常の愛着を持つ狂人と、その妻と、睡蓮の鉢を偶然預かつた爲めに狂人の刃に命を落す男を生み出した。自分はそれを戯曲の形式で描いて見ようと思つた。

兼々、少しでも住居に空所があつたら、犬と金魚を飼はうと願つて居たので、犬きらがひの弟に頼んで、獨逸ポインタアの子供を手に入れて、ウイスキイと名づけたが、貰つて來た時既に病氣で、習日は入院させたけれど藥石效無く死んでしまつた。

金魚の方は、三田の縁日で十ばかり買つたちいさいのが、たつた一つ生残つてゐたのと、家内が病氣見舞に貰つたのを一緒にして、お預りの睡蓮の大瓶に入れ、毎日朝と晩と、近所の溝から糸目をとつて來て餌とした。駄金魚には違ひ無かつたが、あるじの足音がすると、餌をくれるものと知つて寄つて來る姿は可愛らしかつた。

やがて、あだごころが萌し始め、瓶の周囲を追ひつ追はれつするのを見すまして藻を入れてやつたら、恰も淡紅色の睡蓮の花の咲いた日に産卵し、間も無く健全な子供が澤山かへつた。

睡蓮は白いのも、薄紫のも、玉子色のも咲いた。儂ない命の花の色は又なく美しかったけれど、段々花がちいさくなるのを見たり、水面に浮かぶ葉に枯色が見えたりすると、預品の心配が愈々深くなるのであつた。どうかして譲つて頂けるものなら幸ひだと思つて、大隅さんを介して申入れ、遂に目的を達する事が出来た。だが其の頃は、金魚の数が殖えて、四個の大瓶を全部その方に用ゐる必要が起つたので、たうとう睡蓮は他所に引受人を探して處分してしまつた。自分にとつては、植物よりも動物の方が面白いのである。

北隣は株屋さんで、かういふ人が山の手に建てさうな洋館つきの立派な家だ。たとへば一坪あたりいくらかゝつたと云ふ事がほこりとなり、招かれた客も亦其の點

をほめなければならぬやうな家だ。年中蓄音機の長唄が聞え、男衆はのべつに敷石に水を打つて居た。

南隣は玉窓寺といふ有名な御寺で、竹垣をへだて、見える境内には、參詣の人が絶えなかつた。朝早くから勸行の太鼓が、未だうつらうつらして居る枕に響いて来た。その音は、

ぶんめらがつた、ぶんめらがつた

どーんどんぶんめらがつた

と聞えた。

我家の前を通り、玉窓寺の門前を過ると、直ぐ青山の墓地になる。乃木大將の墓參道で、町角には建札さへ立て、ある位だから、天氣のいい日には澤山の人が通つた。門前の溝で、一生懸命になつて糸目をとつてゐるのを、

「何すんだい。」

「金魚の餌だらう。」

「汚ないなあ。」

など、口々にいひながら、先生に引率されて行く小學校の生徒もあつた。

車馬の往來がすくないので、墓參の人は多くても、ちつとも騒々しくは無かつた。佛に捧げる花の枝を手にした人の姿は、吾々の心をも静寂にした。血のつながるおもひでの人を弔ふ心は、一圖に悲しいばかりではないであらう。墓參の人の顔には、温い情愛があふれて居た。

墓地は散歩の場所であつた。晝間は兵隊が喇叭の稽古をするのを、近所の子守が熱心に取巻いて見てゐる。高臺の青空に響き渡る單純な男性的な音楽は、一人前になりかけの女の心を容易に捉へ、並ならぬ關係を結ぶ者も多いといふ事だつた。

玉窓寺と墓地の間の道は、殊に自分の好む散歩道だつた。蔓薔薇の花の眞白に咲く垣根に添つて、夕雲のうつろふ色を屢々見た。その道だけは、ふるひをかけたや

うな細かい土で、勝れて踏心地が柔かだつた。

家といひ周圍といひ、申分は無かつたが、差配人にはつくづく弱らされた。先づ第一に商賣柄、米を買つてくれといふのだが、三田以來の馴染で、何處に引越しても必ず出入りさせて呉れと切望し、現に引越の時には一番働いた米屋がある。小人數の所帯で、自分は晝間は留守、夜も他所で食事を済ませる事が多く、家内は病氣勝で長い間病院に厄介になつてゐたし、二軒から買ふ程の必要は無い。其處で、以前から出入して居て、何の落度も無く、寧ろ感謝すべき米屋を斷る事は出来ないから、不惡思つて貰ひ度いと差配の方へは辭を低くして斷つた。しかし差配の方ではなかなか承知して呉れない。おやちは來なかつたが、かみさんと娘がかはるがはるやつて來て、我が忠實なる女中を口説き立て、しまひには口汚なく罵つて止まないのであつた。自分が最初逢つた時、行儀のよさうな親切さうな母娘だと思つたのが、一通りならぬえらものだつた。店子として、差配人の賣る米を買は無いといふ

法は無い。今迄居た代々の店子はみんな買つてゐたのだから、是非ともさうして貰はなくてはならないと強硬にいひ張るのださうだ。

ところが、外の出入の商人——酒屋、魚屋、八百屋などは、彼の家は親子揃つて因業な奴等で、近所でも鼻つまみなものだから、うちちやつて置くが、あんなうちから買ふのはおよしなさいと、女中に加勢して入智慧する。女中にして見ても、断るのは辛いのだが、さりとて先から出入の方に對する義理も考へ、又あんなうごい權幕でかみさんや娘にがなり立てられるのに憤慨し、進んで差配人の要求に應じようとはしないのであつた。

そこへ持つて来て、こつちがうつかりしてしまつたのは、お盆のつけとどけを忘れた事だつた。家内は入院してゐて留守だし、今迄は相手が福澤家なので、つまらない物を差上げてはかへつて御迷惑だらうと一切廢止ときめてゐたので、自分は全く氣がつかなかつたのだ。此の氣の利かなさを、差配の母娘は眞向から攻撃し、け

ちだ、間拔けだ、禮儀知らずだと怒鳴るのだ。但し此事は餘程たつて、家内が病院から歸つてから、女中が密かに報告したのであつた。癩癩持の主人が、むきになつて怒るだらうと恐れてゐたものらしい。

「しまつたなあ、しかし今更お盆のおつかひ物も持つて行かれないから、暮迄我慢してその時大奮發で荒膽をひしいでやらう。」

どうしませう、どうしませうとばかり云つてゐる家内に話して、一日も早く暮の近づくのを待つた。差配の方は根氣よく、米を買はない不都合と、お盆のつけとどけをしない吝嗇を、口を極めて罵つた。

引越して来て間もなく蒔いた草の花が、不出來ながらも咲き始めた。日向葵、撫子、サルヒヤ、矢車草、鳳仙花などで、自分の手がけたものだと思ふと、高價なる薔薇よりもいとしかつた。朝晩それに水をやる事と、金魚の餌取りは暑い盛りにも忘れなかつた。

蚊のゐる事は覺悟をしてゐたが、意外に風通しのよく無い家だつた。六月から引續いて、大阪毎日新聞に連載してゐる長編「大阪」が、年中追はれ勝で、屢々電報で催促を喰ふ有様だつた。夕方勤先から歸つて、湯に入り、飯を済ませると、直ぐに机にむかつて十二時頃迄執筆する。汗は額からしたゝり、机に突いた肱の所や、洋筆を固く握つて絶間無く動かしてゐる右の手は、殆ど乾く間も無く、折角書いた原稿を濡らして、インキの滲み流れる事が屢々あつた。一回分を書上げて、ほつと一息つくつと、あけ放しの椽に近く、螢の飛んでゐるのを見る事もあつた。虫の音も繁げかつた。

近所の家で、毎晩鼓の稽古をするのが、呑氣な時には面白かつたが、ちつとも筆のはかどらない時には、忌々しくて堪らなかつた。あゝいふ風にして稽古するものなのか、力強い大人の聲で、謠曲の節だけを、

うーらうらア、うーらうらア

うーらうらア、うーらうらア

と幾度となく繰返すのに連れて、少年の一生懸命のかけ聲をしながら打つ太鼓が、遠く迄聞えた。親類の娘の稽古してゐるのを見た事があるが、決して「うーらうらア」では無かつた。

「ちえッ、又うーらうらアを始めやあがつた。」

新聞社からの電報を前にして、自分は耳に入る鼓の音を呪つた。夜が更けて「うーらうらア」が止むと、玉窓寺の森に梟の啼くのが、はつきり聞える。此の孤獨なる鳥の雌を呼ぶ寂しい聲は、聴く者の心を誘つた。高い月を仰いで自分は永い問庭に佇む事があつた。

樹木の多い庭には秋の訪れが早かつた。玉窓寺の小僧達は、ぶんめらがつたの勸行が済むと、朝寒の庭の落葉を掃く。掃いても掃いても、銀杏、櫻、榎、柏、楓、白楊などの葉が、入りまじつて落て、土を埋める。かさこそと風に舞ふ木の葉の音

は、ふと遠い昔の日の記憶をよび起す事があつた。

天氣のいゝ日曜に、大瓶の傍にしやがんで、金魚の餌をえり分けてゐると、垣根の向側では二三人の若い坊さんが、しきりに落葉を掃いてゐた。

「なあ。おい。こないな唄を知つとるか。」

一人の坊さんが、帚の手を止めて仲間へ声をかけた。さうして、風邪を引いてゐるやうな冴えない聲で、流行唄をうたつた。

残念な事に、自分は其の唄の文句を忘れてしまつたが、あなたの方から切出してくれれば何時でもいふ事をきゝます、といふ意味の事を、女學生の言葉でいひあらはしたものだつた。

「どうだ面白いぢやろ。」

さう云つて、もう一度唄つて聞かせた。

「女學生といふものは、不思議なものぢやのう。」

暫時してから嘆息するやうにつぶやいて、又落葉を掃き出した。仲間の者は、最初からしまひ迄一言も口をきかなかつた。これが、おなじ年配の中學生で、もあらうものなら、互に氣障な言葉を投合つたらうが、若い僧侶は笑聲さへ立てなかつた。自分は胸を壓されるやうに感じた。御佛につかへながら、煩惱に苦められてゐる人間の姿を想ふ事が出来た。その後笑話にして人にも聞かせたが、何故か心から笑ふ事は出来なかつた。

落葉を焚く煙は、玉窓寺の庭にも、青山墓地にも、薄紫に立上つた。晝間でもこほろぎの啼く時分になつた。

一晚野分のひどい事があつた。我家の古い竹垣は倒れ、コスモスや日向葵は地上にひれ伏してしまつた。金魚の瓶の中は、折れた枝とちぎれて飛んだ樹木の葉でいっぱいだつた。赤蜻蛉の漆に尻をつけては飛廻る庭に出てゐるところに、差配のちいさんが、植木屋をつれて見廻りに來た。人のよさうな植木屋は、竹垣根を引起

して、手早く荒縄で細工をして行つた。その時差配は、來年の市長選挙で且那が再選されれば、その時になつて完全に直すけれど、それ迄は此のまゝ手をつけないと云つた。しかし、若し借家人の方で植木屋の手間賃を出すなら、直ぐに修復してもいいとつけ足した。自分は返事をしなかつた。そして其の垣根は、翌年の夏迄半倒れのまゝだつた。

十一月の十九日に「大阪」は完結した。拙いものではあつたが、自分の作品の中で、一番長いもので、窮迫した生計を、どうにか斯うにか救つて呉れた。少しでも金を持つと、直ぐに氣が大きくなつて、使ひみちばかり考へる性分だから、暮から正月へかけて何處かに旅をしようなどと、楽しみ數へる中に、差配の米屋が驚く程のお歳暮を、叩きつけてやり度いと云ふ馬鹿々々しい願望もあつた。

いざとなると、あまり子供らしいやり方だと躊躇されて、多少控目にはしたけれど、兎に角差配が豫期しない金一封を届けてやつた。お盆のつけとつけを忘れたからつてあんまりがみがみいふものでは無いぞと云ふ心持を封じてやつたのだ。果して差配は大喜びだつたが、その後も矢張り米を買つてくれといふ要求は引込めなかつた。

年が變つて、霜どけの庭に水仙の芽の萌出る頃になると、その年中の楽しみをいろいろ計畫してみた。先づ第一に、春になつたら庭に池をつくらう。今迄のやうな駄金魚でなく、蘭虫を飼ひませう。花壇も充分土をふるつて、春秋の草花の種を蒔かう。自分が草花の中で一番好きな、秋の七草も植えませう。それよりも、ポインタアかセツタアの相當なやつを手に入れ度い。牝の方は第二世ウイスキイとし、牝の方はデンと名づけよう。子供が生れたら、シエリイ、ワイン、キユンメルなど、いふ酒の名をつけて、青山墓地を引張り廻さう。——それからそれと考へて、嬉しくて堪らなかつたが、いざ春の彌生の頃となつても、例の懷の都合で何一つ實現出來ず、折角買込んだ素晴らしい蓄音機も、音譜を買ふ迄に到らないで、又手放す事の

餘儀ないやうな羽目になつた。

その間に最も困つたのは、氷川町以來の名女中が、嫁に行く事になつて暇をとつた事である。惜みてもなほあまりある人物だつたが、御目出度だから爲方が無い。きりやうよしでおとなしく、行儀がよくて親切だつたから、うちに來る御客でもほめない人は無かつた。出入の商人の御用聞などで、ひそかにおもひを焦したり、小當りに當つたのもあつたらしいが、浮いた氣のちつともない人間だつたから無事だつた。私經濟に於ては、まるつきり理財の觀念の無い自分は、此の人がゐなかつたら、到底所帯を張つてはゐられなかつたらう。滿腔の感謝を表白する爲めに、ひとつ出来る丈の祝物をしようと、又しても大きな事を考へたが、結局小説を書く外には収入の道は無いので、思ふまゝにはならなかつた。此の女の家の者は病弱で、姉も妹も相次いで死んだので、萬一嫁にいつて大病にでもならなければいゝがと、吾々は終始心配しゐた。幸に今は子供も出來て、立派なおかみさんになつてゐるが、

此の人去つて後の我家は、果して慘澹たるものとなつた。

後に残つた小さい女中は、氣ばかり強くていふ事をきかず、只管念じる事は繼母に對する報復だつた。

庭の櫻の大樹は美事なもので、満開から落花の風情は素晴しかつた。櫻といふと花見の景色が直ぐに連想されるが、自分には此の花は限り無く寂しい。殊に薄い花片が風も無いのに先を争つて散り、うすしめりのした土にへばりついてゐる姿ははかな過る。何もかも、おもふに任せない世の態が思はれるのである。

おもふに任せないといへば、池も出來ず、花壇の擴張もお流れとなつたが、勤先の同僚が、アイリツシユ・セツタアの子を二疋呉れた。豫定の通りウイスキイ及びヂンと名づけて、その成長を楽しんだが、薄茶色の愛す可き小犬は、長雨の頃に腸を患つて、久しく病院の手當をうけたあげく、六丈夫助かるといふ院長の保證を裏切つて、共に死んでしまつた。

「此の家は生物の育たないうちではないでせうか。」

と犬きちがひの家内は怨めしがった。

梅雨あけの自ざしも強く、金魚の期節はたけなはとなつた。今年も亦産卵し、餌取りの忙しさは非常なものだつた。青山一帯の溝は、隈無く求めた。しかし、睡蓮の鉢のはいつてゐた瓶の中では、折角かへつた子金魚の運動が不充分で、且水温が熱し易く冷め易く、到底満足には發育しなかつた。どうしても池だけは作らなくてはならないと思つてゐるところに、突然家主の市長さんが落選して歸京するといふ報知を、差配の米屋が持つて來た。

夏になると任期が切れるとは聞いてゐたが、久しく天下を我ものゝ如く心得てゐる政友會系統だといふから、たぶん再選されるのだらうと多寡をくゝつてゐたところ、落選したといふのは意外だつた。差配人は主人から來た「キンジツキキヤウスル」といふ電報を見せて、最初の約定通り成る可く早くあけ渡して貰ひ度いと云つ

た。

自分は政友會の勢力の傾き始めた大原因、原敬氏の死を今更ながら惜み、此の政治家を刺した不良少年を憎んだ。生半熟の政治狂か、賣名の徒か、いづれにしても東京驛頭に閃いたヒ首が、やがて自分が満足してゐる住居をうばふ結果となつただと考へた。(大正十三年八月二十六日)

我
家
の
犬

貝
殼
迫
放

自分の記憶によれば、自分の父母の家には、三十余年間殆んど始終犬が居た。それ等の犬の姿體、毛色、音聲、性質、殊に眼つきは、生涯忘れる事が無いであらう。自分の生れる前から居たのかも知れないが、物心ついた時、うちに居たのはポチと云ふセッターの特徴をかすかにとどめる雜種の牡犬だった。黒班の額と胸と腹と四肢の白い、少しばかり波を打つて毛の縮れて居る、中位の大きさの犬であつた。まさかには、それ程幼い時の記憶がある筈は無いと思ふのだが、誰かの手に兩足をつかまれて、椽側から庭へしつこする自分を見上げて居るポチの姿を、今でも明瞭に想ひ描く事が出来る。恐らくは自分の勝手にこしらへた想像が、年を経てほんとの事のやうに考へられるのであらうが、しかし二才や三才の幼児にも、ほんとに心に残る印象は、やきつけられるものでは無いだらうか。

そんな風に、ほんとにあつた事なのか、自分でこしらへた事なのかわからなくなつて、しかも自分に丈はつきりと、その時の景色から人の聲迄想ひ出せる事がある。多分これも三才位の事だらうと思ふが、父と母が旅行をした留守、自分は母方の祖母に抱かれて寝て居た。痢の強い子供だつたから、その晩もむづかつて、人々を困らせたのであらう。夜更に祖母の背におぶはれて、なほ眠られずに母親を戀しがつて居たものらしい。それが冬の夜に違ひないと思ふのは、確かに自分は綿の厚いねんねの中に居た記憶がある。家は飯倉の坂の上の、天文臺の近くだつたが、寂しい屋敷町の夜半に、

「人殺しい、人殺しい。」

と切迫して叫ぶ聲を聞いた。女の聲だと景色は一層はつきりするのだが、確かにそれは男の聲だつた。祖母がきつとなつて聞耳を立てた顔に頬を擦りつけてしがみついた。それつきり何の事も無く、おびえた犬の遠吠が聞えた。その犬の聲が、う

ちのポチだつたか、他所の犬だつたか、自分は知ら無い。

此の事については、其後十数年たつてから、祖母に眞偽を訊いて見た事がある。祖母も曾て「人殺しい」といふ叫聲を聞いた事はあるが、それが私を背におぶつて居たやうな比較的新しい昔の事では無く、もつともつと前の事のやうに思ふ、第一その頃の私のやうなちいさなものが、そんな事を覚えて居る筈が無いと云つて笑つた。しかし自分は、矢張り自分の記憶の方が確かだと今も信じて居る。

飯倉の家には五才の春迄居て、次には三田松坂町に住んだ。引越の日には、父、母、祖母、兄、姉、自分、女中達の乗る人力車が一行に驅けて行くのにくつついて、ポチもあえぎながら走つた。

新しい家の前は広い原で、久しい間子供の自由な遊場になつて居た。いけないいけないと云はれながら、家の中で遊ぶのが嫌ひで、野放しにあばれ廻つて居る町つ子の仲間入がしたくて堪らなかつた自分は、年中其の原つばに出かけて行つた。何

時の間にか世間智の發達してしまふ町つ子は、いろんな事を教へてくれた。若い娘でも通ると、「あの姐さんいい姐さん」など、一齊にはやし立てる事も教はつた。男女のまじはりについて説明し、坊ちゃんも其の結果生れたのだからかはれた時は、自分は火のやうに怒つて其の町つ子にむしやぶりつき、必死になつて格闘した。

又、「ちやんこ何處へ行く」といふ卑猥極まる唄を教はつて、全く何の意味だかわからずに、うちに歸つて大きな聲でうたつて居た事もあつた。頭髮の縮れた、頬邊の眞赤な守女もりこの手を放れた頃だつたから、往來に遊びに行く時は、大概ポチがついて來た。

ポチよ來い來い、團子もやるぞ麵麩もやるぞ

とその當時の讀本の文句をきゝ嚙つて、町つ子と共に聲を揃へて叫んだ。

近所には澤山犬が居た。その犬どもをけしかけて喧嘩をさせるのが、子供の遊戯のひとつだつた。生憎ポチは強くなかつた。年もとつて居たのだらうが、性質も穩

和で、鬭争を好まなかつたらしい。ちいつぼけな瘦犬にも、尻尾を卷いて逃げてしまつた。ポチは弱いと、一口に町つ子にけなされるのが口惜しかつた。

「駄目だよ、こいつは一もくだから。」

ポチの顎を上に向かせて、咽喉に生えて居る一本の白い毛を引張つて見せる悪童もあつた。昔からのいひ傳へか、三もくの犬が強いのだと子供達は云つた。

ポチの死んだのは何時だか知らないが、その次には黒といふ眞黒な、何處にも取得の無い駄犬が居た。誰が貰つて來たのか覚えてゐないが日本犬の姿を多分に殘してゐる瘦つぼちの、貧弱極まる犬だつた。あんまりきりやうがよくないので、うちの者も可愛がつて居なかつたやうに記憶する。ところが此の黒が、喧嘩になると強かつた。いざと云ふ時は骨張つた四肢に力がみちて、きちがひのやうに相手の咽喉に噛みつくのである。その喧嘩のしぶりも、決して立派な型を備へて居ないので無闇に氣が強くて、死身になつてぶつかるのである。相撲でいへば、大關相撲の

貫祿は無いのだが、小兵ながらも諸手突の鐵砲と咽喉輪で攻めぬかうと云ふ奴だつた。退却の戦法を知らない日本の兵士のやうだつた。たぶん、それは日本犬の特徴であらう。或は日本人の特徴でもあらうか。但し黒が三もくだつたか一もくだつたか、今之を審かにしない。

黒はあまり長く居なかつた。ポチと同じく、此の犬も何時の間にか居なくなつた。犬殺のさかんに横行した時代だから、殺されたのかも知れないが、犬は主人に死骸を見せないものだ、うちの車夫や女中は云つて居た。久しい間自分も此の説を信じて居た。たぶん、人智の限りを盡して飼育する近代的のやり方で無く、單に首輪と食物を與へる以外には何の面倒も見てやらない野放しの飼ひ方をして居ると、人目にかゝらない椽の下か何かで、最後の呼吸を引取るのかもしれない。或はこれも、日本犬の血の多分にあるものに限る道徳であるかも知れない。何れにしても、自分はポチと黒の死顔を知らないで済んだ。

その頃芝の山内に住んで居た末延道成さんの所には、何時もすぐれた犬が居た。御子さんが無いので、奥さんが我子のやうに可愛がつて居ると云ふ話をよく聞いた。公園の松林の中を、二疋の洋犬を引つれて散歩してゐらつしやる奥さんの姿を、羨しく思つた事もある。うちでも後から後から生れる妹や弟のかはりに、あゝいふいゝ犬が欲しいと思つた事もある。

子供達の心にひかれて、母が御願ひして呉れたのであらう。末延さんで生れた英吉利ポインターの子を、牝牡二疋貰ふ事になつた時の喜びといふものは無かつた。乳母車を持つて頂戴に行つた車夫の歸る迄に犬小舎の藁をかへて、自分達兄弟は待兼ねて居た。やがて歸つて來た車夫も大得意だつた。乳母車の上にひつつきあつて眠つてゐる茶斑の二疋は、吾々がそれ迄に見た事も無い奇麗な犬だつた。だらりと長く垂れた耳、すんなりと平になびく尻尾、龍の髯の果のやうな碧く澄んだ眼、短く柔かい毛の手觸り——自分達は夢中になつて、争つて抱いたり頬擦りしたりした。

うちに居る時は本を讀んで居るばかりで、ついで外の事には興味を持たず、決して口出しをしない父も、これはいゝ犬だとほめたゝへ、あまつさへ自分から進んで名前をつけた。牝の方が Hero で牝の方が Lily である。自分の子供には、誰にも分り易い小僧名前をつけ、是非ともお祖父様に命名して頂き度いといふ孫の名に平俗なのを撰んでお嫁さんを失望させるやうな父であつたが、これは餘程世間並の凝りかたを見せたもので、或は父から見たら、一段格を落したやり方であつたかも知れない。子供の相手になんかならない筈の父が、ポチとか黒とかいふありふれたのでない、すつきりした名をつけてくれたのだから、吾々は一層嬉しがつた。片方が勇士で、片方が百合といふ英語なのだときかされて、それを又外の者に説明してやるので大得意だつた。呼ぶ時にはヒロとリリだつた。しかし、ヒとシとの區別のつかない連中は、折角の名前なのに、シロシロと呼んでゐた。

けれども、すべて美しいもの、純粹のものは弱いのか、此の二疋の仔犬は永く我家に育たず、癩癩を起し、あはてゝ病院に入れたけれど、藥石效なく前後して死んでしまつた。

ヒロとリリが一家の寵を集めて居た時期は短かつたけれど、それ以來犬を見る眼がせいたくになつて、今更黒のやうな姿體のいやしい犬を飼ふ氣にはなれなくなつた。何時迄も死んだ二疋の美しく、可愛らしかつた事ばかり家人は話合つた。

それかあらぬか、一時の間我家に犬のゐない事があつた。そのかはりに山羊を飼つて居た事もあり、鳶を飼つて居た事もある。山羊は顔つきは可愛らしかつたけれど、庭を荒して爲方が無かつた。鳶は丁字形の棲木に綱で縛つて置いた。日清戦争の後で、高千穂艦の帆柱に鷹のとまつた話が廣く傳へられて居た時代だから、それと結びつけて、子供心に強い興味をいだかせたが、その實決して面白いものでは無かつた。矢張り犬が一番いゝと思つたが、ヒロとリリが何時迄も忘れられ無い爲め、思ふやうな犬にはなかなか出あはなかつた。

もう自分も、十一二にはなつてゐたらう。五月雨の頃であつた。傘をさして足駄穿で、綱坂を越て、中之橋迄何か買物に行つた日の事である。慶應義塾の幼稚舎の裏手の塀にそつて、綱坂の上迄、兩側の大きな宅邸の暗く茂つた大樹の枝から、雨の雫のしたたり落るのが、土を打つてはねをあげてゐたが、それにまじつて數限りも無く、蛙の子が飛んで居た。びよんびよん飛上る眞黒な踊子は、自分の足にも飛びついた。一步々々に幾疋と無く踏みつぶしさうなので、注意深く歩いて行くと、坂を上り切つた所の溝から這上つた小さい犬が、きゅんきゅん泣いて往來をさまよつて居た。ポインター種の七八分は残つて居る濃い茶斑で、眼つきの優しい牝犬である。誰かが溝に捨てたのであらう、母犬の乳房を無理に引離されて、寂しがり、途方にくれてゐたところだから、人の姿を見てなつかしがつて、よたよたよろけながら寄つて來た。手を出すと、眼を細くして頭を擦りつけて來る。咽喉のところを靜に撫てやると、すつかり疲れて居るのであらう、いゝ心持さうに眼をつぶつて、

手の平の上に首をのせたまゝ居睡を始めた。

拾つてうちに連れて行き度いなあと、堪らなく可愛くなつたが、牝だといふ事が邪魔になつて決しかねた。牝犬はさかりのつく頃うるさくて爲方が無いし、悪い牝とでもつがふと、始末のつかない仔犬を生むし、どんな犬でもいゝから牝でなければいけないと、始終うちで云はれて居るので、若しもこれを連れて歸つて、萬一うちで飼つてもいゝといふ御許しが出ないと、又何處かに捨てに行かなければならぬ。こんな可愛らしいものを、自分の手でむざんに捨てる事は出来なと思つて、充分未練のあるのを自ら振切つて立上つた。いゝ氣持で眠つてゐた犬は、びつくりして眼を開いたが、又ひとりぼつちになるとさつたのであらう、一二歩あるき出した自分の踵を追かけて、きゅんきゅん泣きながらついて來る。おもはず知らず足をとめると、水たまりも構はずにかけて來て、しきりに尻尾を振り立てるのであつた。さうされると又愛着が深くなつて、直ぐにも抱上げて連れて歸りたくなる。又

しばらく仔犬の頭を撫てゐたが、折柄坂の下の方から二三人學生らしい姿が見えたので、その中の誰か拾つてくれればいと云ふ期待を残して、思ひ切つて歩き出した。仔犬は一段高く悲氣な泣聲をふりしぼつて追かけて來ようとしたが、自分の體の中心さへ支へ切れないで、つまづいてぬかるみに倒れた。自分は逃るやうに横町に曲つてしまつた。

中之橋の用事を済ませて歸る時、さつきの仔犬の事ばかり氣になつて、又同じ道を逆に引返した。誰かなさけ深い人が拾つてくれ、ばいゝが、未だ雨に濡れて泣いてゐるのだらうか、それよりもいたづらつこに見つかつて、首に荒繩でも巻きつけられ、ひどいめにあはされては居ないだらうかと考へると、心配で堪らなくなつて、足駄の足も早くなつた。

もとの所に来て見ると、仔犬はまだ雨に濡れながらうろろして居たが、通りかゝりの車やが、足をとめて見て居るところだつた。

「坊ちゃん、拾つてつておやんなさいな。いゝカメ犬ですよ。」

人のよさうな老車夫は、自分を見ると直ぐに聲をかけた。大好きらしい善良な眼尻に皺を寄せて、足下に尾をふつてゐる仔犬を、さも可愛らしさうに見て居た。

「可愛さうに、こんな所に捨てやがつて、うちやつとけば死んじまひますよ。」

さう云はれると、自分の心は又動いた。兎も角もうち迄連れて行かうかと思つて、しやがんで手を出すと、仔犬は先刻の馴染だと知つた様子で、車やの足下を離れてよろけながら驅けて來た。雨に濡れた冷たさにぶるぶる震へてゐるのが、ひとしほ哀れだつた。

「ね、いゝ犬でしょ、こんなのは狩につれてつたつて働きますせ。」

車やも梶棒をおろして、しやがんだ。

「けど牝なんだもの。」

自分は車やがあんまり熱心に勧めるので、のつびきならないはめに陥りさうなの

を恐れてゐた。

「なあに牝の方が狩犬にも番犬にもいゝんですよ。おまけに此の位の犬なら、いゝ牡をかけて御覽なさい。素配しい子供が生まれますせ。ね、此の耳がいゝや。」

仔犬を両手で抱上げて、柔かい耳を手の平にのせて見せた。自分にはその耳の根元の少し持上り氣持なのがいけない、純粹のポインターなら、もつとびつたりと兩頬に垂下つて居る筈だと思はれた。とはいへ柔和な仔犬の顔を見てゐると、欲しくて堪らなかつた。

「坊ちゃん、拾つておやんなさいよ。」

充分未練があると見てとつて、車やは又勧めるのであつた。

「だけど牝なんだから。」

自分は同じ事を繰返して立上つた。自分が拾つてやらないと、車やはさぞかし無慈悲な奴だと思ふだらうとは考へたが、愚圖々々して居ると如何しても車やに口説

き落されてしまひさうなので、さげすんだ車やの眼つきを背中に感じながら、見切をつけて歩き出した。逃るやうに足早に坂の下口で一度振返つたら、車やも進んで如何するといふ氣も起さなかつたと見えて、人力車をひきながら、自分とは反對の方に遠ざかつて行つた。仔犬は途方に暮れた姿で、溝のふちをうろついて居た。

うちに歸りつく迄、自分は犬の子を見捨て、來た事で氣が咎めて爲方が無かつた。母の顔を見ると直ぐに、いかに其の仔犬が可愛らしく、いかに捨てられて泣いて居る姿が哀れであるかを話し、若し牝犬でもいゝと許してくれるなら、これからもう一度綱板の上まで行つて拾つて來ると云つた。最初は母も牝では後々子供を生んで處分に困るからいけないと云つて居たが、あんまり自分が熱心にせがむので、遂には拾つて來てもいいと許してくれた。

「けれども、もう誰か拾つて行つたかもしれないよ。」

と、何とかして思ひ止まらせようとする口ぶりを残して居たが、自分はそんな事

ではひるまなかつた。直ぐに又傘をさして、愈々降りまさる雨の往來に出た。

綱坂の下迄來ると、相變らず數限りも無い子蛙が、豆を撒くやうに飛んで居た。急な坂を上り切ると、或はもう誰かの手に救はれたか、それでないにしても何處か外の場所に迷つて行つたらうと思つて居た仔犬は、矢張り同じ所に、雨に濡れてきゆんきゆん泣いてゐた。東に行かうか西に行かうかと迷ひながら決しかねて居る姿で、往來をうろうろして居た。夕暮近くなつて、一層木立の蔭の暗くなつた中を、ちいさいものはわなわな震へながら、自分の姿を認めて、訴へるやうな聲を張上げて泣く。自分はいきなり抱上げたが、なま温かく柔かい體から水がしたゝり落る位じつとり濡れて居た。それでも構はずに片手で胸の處へ抱き、片手で傘をさして歩き出した。犬の體を汚してゐた泥土は、自分の胸をよごした。仔犬は人間の手に抱かれてすつかり安心したと見え、間も無く眼を閉じて眠つた。體の重みが片手にかゝるので、時々左から右へ、右から左へと替へて見たけれど、しまひにはやり切れ

なくなつて、傘をつぼめて腋の下にかゝへ、両手で犬を抱いて、自分も頭から濡れて歸つた。哀れなものを救つたといふ喜びでいつばいだつた。どうかしてあの老車夫にめぐりあひ、此の犬をつれて歩くところを見せてやり度かつた。

母を始めとしてうちの者も、牝犬だと云ふ事を恐れて居たが、仔犬を見るとみんな氣に入つてしまつた。乾いた布で濡れた體を拭き、柔かい敷藁の犬小舎に入れ、牛乳を飲ませてやると、一切の事を忘れて食器の中に體に比して大きい顔を突込んで、雫も餘まさずなめてしまつたが、御腹がはるといふ氣持になつて寢てしまつた。名前は此前のすぐれた犬の名をとつて二代目ヒロとした。ヒロは男の名だとは知つて居たけれど、ひたすら名犬にあやかれと念じてつけた。左程まさり劣りは無かつたが、リリよりもヒロの方が人氣があつたのである。

二代目ヒロは健康で、温順だつた。大人になつてからは、子供時代よりも少々きりやうは落たけれど、捨犬とは思はれない風姿を備へて居た。此の犬程いたづらを

しず、又おちついた態度の犬を曾て見た事が無い。たゞ不思議にお産が下手だった。牝犬一疋しか居ないのだから、近所の首輪とはめて居ないやうなのら犬迄が、年中張りに来た。男親は知らないが、翌年妊娠して無事に四五疋生みはしたけれど、どうしたものか二三日目にみんな死んでしまった。たぶん添乳の時に窒息させてしまったものらしい。その翌年はどうしたものか、平生馴れてゐる小舎に生まず、椽の下の奥深くに生んだ。今度も相手はわからないが、生れたのは雑交の特徴であらう、種々雑多の奴がゐた。漸くいたづら氣が出て来る頃、母親の後にくつついて、ちよろちよろ庭に這ひ出しては、人を見ると素早く又椽の下に逃込んでしまふのが五疋ゐた。その中で、二疋はまるつきり取得が無かつたが、後の三疋の二つは、兎も角も母親の血統だとなづけるもので、但し母親よりもつと雑種の度を強めたものだった。もう一つ一番太くたくましいのは、母親とはまるつきり似もつかず、長い毛の縮れたセツタアと土佐犬の雑種のやうな、白に黒班のものであつた。きりや

うのよくない二疋は出入の商人が貰つて行き、一疋は自分の學校友達にやり、セツタアまがひのたくましいのは鎌倉の別荘の番犬とした。もう一疋黒斑の母親に似て稍細長く、胴のあたりはグレイハウンドの出来そこないのやうなのをうちに残した。つまりこれが後日ヒロの夫となり、十餘年偕老同穴の契を結んだのである。此の方の名も亦父にせがんでつけて貰つた。ヒロとリリ以來、吾々は父のさういふ方面の才能に信頼と尊敬を持つて居た。父も子供達が自分のつけた名前を無上に喜んだ事を知つて、今度も上機嫌で引受けて *Pino* と命名した。松坂町の松からとつた洒落である。吾々は又感心して、得意になつて *パイン* と呼んだ。父は少年時に學者たらんと志し、齋藤拙堂先生の門に入り、後には小野湖山先生について漢詩を學んだ事があつて、文學的素養は充分に持つて居た。實業家としてよりも、その肌合ひからいふと學者風だった。犬の名を撰ぶ場合にも、文學的機智がひらめいたやうに思はれる。

父は自分の仕事と讀書以外には甚だ不精だつた。人と無駄口をきく事などは面倒で堪らないらしかつた。それよりも好きな西洋煙草をふかして、默然と端座して居る方が心自ら楽しむ事だつた。さういふ性分だつたから、たまたま庭を散歩して居る時などに、ヒロやパインが踵にくつついて來ても、決して手を延ばして頭を撫でるやうな事はしなかつた。ひとつには持前の極端な潔癖が、獸に手を觸れる事を心地よしとさせなかつたのかもしれない。後年病氣をして、大好物の酒を醫者に禁じられ、且運動を勧められた時、草花の種を買はせて自分で蒔く積りだつたが、どうしても素手で泥土をいぢる事が出来なかつたと見えて、ステツキの先で土をほじくりかへし、その上に種子を蒔きちらし、庭下駄を穿いたまゝの足で土をかぶせたばかりだつた。それ丈の事さへ長續きはしなかつた。

母はあらゆるものを無闇に愛した。人間禽獸虫魚草木、何に對してもおのれを空しくして可愛がつた。どんな犬でも、一番母の愛撫の手に眼を細くした。たまたま

狂暴な犬があつても、母は平氣で手の平に食物をのせて與へた。こつちが心から可愛がつてやれば、狂犬でも喰ひつく筈が無いと確く信じてゐた。父には犬の良否はわかつたやうだが、母は絶對無差別だつた。どんなむく犬でも可愛がつた。殊にヒロのやうな、十數年ゐつた犬の如きは、我子のやうに可愛がつた。晩年愈々穩かになつたヒロが、老齡の爲めに體が重くなり、柔和な眼の光が佛のやうな姿に見せるのを、吾々は母に比べて、ヒロはお母さんによく似てゐるとからかつた。

ヒロは十數年番犬の役目を完全につとめて、明治四十三年老病を以て没した。遺骸は芝白金志田町の松秀寺に葬られた。

ヒロが死んだ時は、パインも既に年をとつて居た。此の犬は母に似ず、おちつきが無いきゝわけの悪い犬だつた。とぼけたところは有つたが、人なつつこいところの無い、可愛氣の無い犬だつた。従而、母を除いては、誰も餘り可愛がらなかつた。もう一疋いゝ犬が欲しいとみんなが願つてゐた。

ところへ友人仙波均平さん（その當時は岡見均平さん）のうちのポインターが子供を生んだから、一疋分けてもいゝと云ふので、早速貰ふ事にした。白金の仙波さんのうちに遊びに行くと、茶斑の牝のポインターが、蜜蜂の箱の置いてある芝生に優美な姿を見せてゐたが、どうかあれに似たのであつてくれ、ばい、と念じてゐた。恰度七月の學期試験の始まる頃、末の弟二人が、犬を包む爲めに風呂敷を持つて一緒に رفتた。雨あがりの空氣の重たい日で、仙波さんの庭はしつとり濡れ、蜜蜂の巢を取巻いて、夏の花が咲揃つてゐた。

四疋生れた中で、牡はたつたこれひとつと云ふ母親似の濃くくすんだ茶の斑點のある可愛らしいのを貰つた。耳の長く垂れた、頭の重さうな小犬を風呂敷にくるんで、弟二人がかはるがはる抱いて、町を歩くのが自慢になる程きりやうよしだつた。二代目のヒロなどよりは遙かに優良だつた。

幼稚舎に入つたばかりの弟の手には、仔犬でも重みがかかり過ぎる。命がけとい

ふ形で胸にしつかり抱いて行くと、もう一人も抱いて見度くて堪らなくなる。みちみち其處いらの犬と比較して充分得意だつた。うちの近く迄來ると、一番末の弟は、うちの者に注進する積りで、いつさんにかけて出した。

かねて奇麗に掃除してあつた大きな犬小舎に、仔犬は見知らぬ國に來た怖れで震へてゐたが、集つて來たうち中の者は、いゝ犬だ、いゝ犬だと口々にほめた、へ、御使に行つた二人の弟は、自分達の手柄のやうに鼻を高くした。パインは年をとつてゐる癖に、新來の仔犬がちやほやされるのを見て嫉妬を起し、頻に鼻を鳴らして威嚇した。

ほの青き桐の反射の漂へる皿のミルクを飲める犬の子

貰はれし仔犬はあはれ身に廣き小舎の寢藁によもすがら啼く

老犬が鼻を鳴らしていさゝかの食を争ふ事のあはれさ

その頃の自分の手帳にはこんな歌が書きとめてある。

仔犬の名前を何としようかといふのが一家の問題になった。ちいさい弟は幼稚舎で習つたのか、英語かるたで覺えたのか、岡見さんから貰つたのだからウルフ(狼)がいと主張したが、折角の洒落も呼びにくいと云ふ理由で否決された。岡見の岡をとつてヒルがいと云ふ者もあつたが、蛭を連想するからいけないと云ふ反對が出た。結局三代目のヒロを名のる事になつた。

心配したのは夜だつた。母の乳房に別れた仔犬は夜一夜泣く事だらうと思つた。兎に角犬小舎から出られないやうに板で圍つて自分も寝たが、折々二聲三聲悲氣に泣いたばかりで存外おとなしかつたが、何の物音もしないと、若しか逃げ出したのではあるまいかと心配になつて、手燭を持つて庭に出た事も數度に及んだ。

曉方床の中で目が覺めると、犬の事が心配なので直ぐ起きてしまつた。未だ誰も起きない時刻だつた。小雨の降る庭に出て、犬小舎に行つて見ると、どうしたのか仔犬の姿が見えない。どうしてこんな隙間から逃げたらうと思ひながら、家の廻を

幾度も探し廻つたが見つからない。門前に出ても影も見えない。名を呼んだり、口笛を吹いたり小一時間もかゝつて愈々遠くに逃げてしまつたか、又はむく犬に殺されたかとかつかりして佇んでゐると、思ひもかけない椽の下からちよろちよろかけ出して來た。

しかし此の犬は約一箇月後、自分が鎌倉へ行つてゐる留守に行衛不明になつて、それつきり再び姿を見せなかつた。きりやうがよかつたから、誘拐されたものであらう。

その後自分は長い間父母の家を離れた。その間にバインは死んだが、犬きちがひの弟は次から次といろんな犬を飼つた。飼育の方法も上手になり、昔は他所から拾つて來たり、くれる人があれば貰ふといふ態度だつたのが、進んで獵犬商會から買求めて來るやうにもなつた。土佐犬もゐた。四肢の短い鼬のやうな格好のダツチスハンドもゐた。耳の長いビイグルもゐた。北京犬もゐた。神経質なフォックステリ

アもゐた。今はブルドッグとグリフォンとコリイが居る。

自分も家を持つたら、いゝ犬を飼ひませうと常々思つてゐたので、大正十一年に青山南町二丁目に住んでゐる時、弟の世話で、慶應義塾の柔道師範飯塚先生のところで生れた獨逸ポインターを貰つてウイスキイと名づけたが、うちに連れて來た時既に病氣で、青山七丁目の犬猫病院でみまかつた。

翌年勤先の同僚岩本さんといふ動物きちがひで、且其道の達人が、愛蘭セッターを牝牡くれた。少し外の種類の血もまじつてゐるといふ事だつたが、吾々の家にはもつたない位の犬だつた。二疋とも飴色で、牝のウイスキイは稍毛深く、牝のデンは御腹の邊が少し白かつた。長い間病氣で家内は寝てゐたので、毎朝毎夕の散歩には自分が連れて出た。二條の鎖を引張つて、沼澤地方の銃獵に適するといふ此種の犬の特徴か、匍匐するやうな形で土の匂を嗅ぎながら、青山墓地で遊んだ。近所の子供は、まさかにウイスキイといふ名だとは思ひもかけないので、吾々がウイスと

略して呼ぶのをきゝ、噛り、エヌエヌと呼んでゐた。しかし此の二疋も、長雨の頃に腸を患ひ、近所の病院に入院し、院長は大丈夫受合つたと云つたが、次第々々に瘦衰へて死んでしまつた。

あんまり度々の失敗で、他所から貰ふと申譯の無い心持に惱まされるから、少し財政にゆとりが出来たら、手頃の奴を買ひませうと思つてゐた。恰度大地震の後で、世の中は物騒になり、人の心は荒み、吾々の心持には寂寞の陰影が深くなつたのをまぎらす爲め、夜番の爲めに毎晩泊りに來て呉れた犬きちがひの弟を顧問として、英吉利ポインターの奇麗なのを買ひ、三代目ウイスキイを名のらせた。その時は既に麴町に越してゐて、荒れてはゐても廣い庭があつたから、犬の運動には都合がよかつた。妙に堅意地な、人になつかない性質ではあつたが、何しろきりやうは素晴しくいゝので、時には革紐をつけて往來にも引張つて出たが、道ゆく人は足をとめてほめた。それですつかりいゝ氣持になり、同じ時に同じ腹から生れた、誰が見て

も同じ形と色を備へた牝を、餘裕のない癖に又買つて、これを二代目のデンにした。だが何といふなさない事であらう、弟の外に勤先の同僚で、どんな犬とも親類づきあひをして居るやうな高倉さんの懇切丁寧な注意を受けてゐたにも拘らず、おしつまつた年の暮に、デイステンバアにかゝつて、市ヶ谷の犬猫病院で二疋とも死んでしまつた。院長さんの妹だといふ美しい方が、只今危篤ですから死目に逢ふやうにと驅けて知らせに来て下さつたので、あわて、後からついて行つたが、哀れなる仔犬は既に事切れてつめたくなつてゐた。家内は唇の色も失つて、泣き出しさうな顔をしてゐた。

「しかたがないよ、しかたがないよ。」

院長さんや御令妹になぐさめられて、自分達は暗い氣持で家に歸つた。

人間の根性のとげとげしさに、世の中の寂寞を深く想ふ自分は、眞心を以て主人につかへる犬の心愛する。恐らく犬は動物の中で、最もデリケートな心を持ち、

喜怒哀樂を純情をもつて表はすものであらう。怒る時は勇敢に咆哮し、喜ぶ時は尻尾の先迄表情を示して偽り無き眞情をあらはし、あやまちを犯して叱咤されれば、急ち悔いて地に匍匐する。人間に親昵する情の深い事は、他の動物中比ぶ可きものを見出さない。己を愛する主人の命に従ふ事を最上の幸福とし、主の爲めには全身を捧げて顧みず、假令讎怨は忘るゝ事あるも恩愛は決して忘れない。正直で且責任觀念が強く、苟にも卑劣な根性を持つてゐない。

犬よ犬よ、健かに我家に育ち、自分達と生涯を共にしておくれ。(大正十三年九月二十四日)

貝殼追放

三〇

倫敦時代の郡虎彦君

郡虎彦君が死んだ。詳しい事はわからないが、以前から悪かつた胸の病氣を養つてゐた瑞西で死んだらしい。年は未だ若く、大きな野心を持つて居た人である。

私が郡君と親しくつきあつたのは、大正三年の秋から四年の年の暮迄で、即ち彼が認められる前の倫敦時代である。勿論其前から、互に顔は見知つて居たが、口をきいた事は一度も無つた。寧ろ御互に、いやな奴だと思ひ合つてゐたかもしれない。それが果して郡君の公にした第一作かどうかは知らないが、たしか明治四十四年頃であらう、「太陽」の懸賞に萱野二十一といふ筆名で應募して、内田魯庵氏に選ばれた「松山一家」と云ふ小説があつた。その小説を、私は今臆氣にしか記憶してゐないが、當時としては著しく外國かぶれのしたものだつたと思ふ。作品の出来榮よりも、作者の年齢が僅かに二十一才だといふ事で、驚きもし、羨みもした。恰も久

保田万太郎氏の「朝顔」について、私の處女作「山の手の子」が「三田文學」に出た時代だった。吾々の連中も、御手々を膝に置いて澄ましては居られない心持に驅られて居た。自分の前途に不安と希望を持ちながら、仲間を集めて歩き廻つた。カフェー・プランタンとか鴻の巣とかいふうちの出来たてで、藝術家や藝術家がつたのが年中とぐるを巻いて居たが、吾々も怖々ながら、そんなところに足を踏入れるのを得意にして居た。行くと必ず萱野二十一を見出した。まるまると肥つた小男で、頭髪をてかてか光らせ、桃色のクリームで頬邊を染め、ボンボンのやうな顔つきで、新型の派手な好みの洋服に山高帽子といふ姿が、今になつて考へると滑稽だが、當時は眞當面に氣障だと思つた。一體に芝居氣に乏しく、人目に立つ事をいやがる三田の氣風から、吾々はそぐろに輕蔑の念を催したものであつた。

あんまり度々顔が合ふので、吾々の仲間の中からも口をきく者も出て來た。わざと酔拂つたふりをして、貴公子然と氣取つて居る相手を、困らせた者もあつたやう

だ。しかし、氣心の知れない人と氣輕に話の出来ない私は、その頃は遂に一度も口をきかなかつた。

當時吾々は、慶應義塾で永年教授を勤めたヰイツカース先生の住宅の後の文科教室の二階を、倶樂部のやうにして集まつて居た。階下の教員食堂の賄をしてゐる大和軒といふ西洋料理屋が、こつそり融通をきかしてくれる一品辨當や、ライスカレーを喰べて、朝から晩迄無駄に時間を費して居た。

或時カフェで郡君にあつた吾々の連中の一人が、右の倶樂部に遊びに來ないかと誘つて、

「ハム、エッグスと紅茶位はありますよ。」

と云つたところ、

「まるで朝飯のやうですなあ。」

と向ふは笑つたといふ。此の話は、如何に郡君が世間並の書生と違つたハイカラ

で、且氣障であるかといふ例證として、當分の間度々話材となつた。

四十四年八月の「三田文學」には「父と母」といふ一幕物を發表し、四十五年の四月號には「道成寺」が出た。これが自由劇場第六回試演の際舞臺に上つたので、萱野二十一の名は一層廣く文壇に知られるやうになつた。郡君の最も得意の時代だつたであらう。間も無く彼は歐羅巴に行つた。

私が亞米利加に行つたのも同じ頃である。二年間其處で暮らして、愈々英吉利へ渡らうとする時に戦争が始まつた。獨逸にゐた澤木梢君小泉信三君などが無事に海峡を越えて倫敦に着いたといふ報知を受けたので、飛行船襲撃の危険と、海上の危険とおもひやつて人々が引止めたにも拘らず、大正三年の秋九月紐育を立つた。

倫敦では、澤木小泉兩君が萬事案内役だつた。みんな方角の違ふところに住んでゐたので、時間と場所を極めては落合つた。澤木君と二人の時は、オスカア・ワールドが胸に日向葵の花をさし、異様な服装で、大きな腹の中に無量にツイスキイ・

ソウダを流し込んだといふカフェ・ロオヤルが選ばれ、小泉君の時は、烏龍茶を賣る茶店が多く選ばれた。倫敦に着いて三日目に、始めて其の茶店に連れて行かれた時、偶然郡君と生田葵山氏と山本鼎氏とにあつた。澤木君の紹介で、久しくお互に顔は知りながら口をきかなかつた郡君と、初對面の挨拶をした。

その後、烏龍茶店に行くと、何時も必ず郡君が来て居た。大概一人の事は少なく、誰かしら連があつたが、多くはダンスを研究してゐると稱する伊藤道雄が一緒だつた。伊藤は子供の頃慶應義塾の普通部にゐて、極めて臆面の無い少年だつたから、上級生の私も知つてゐた。その伊藤を郡君は道具にして居た。

烏龍茶店には、日本娘が五人ばかりゐた。最初、その監督としてついて居たのは三木竹二氏の未亡人眞如女史だつたさうだが、永續きしないで歸つてしまつたといふ事で、吾々の時代には、別の年増がゐた。此の人の事を、吾々は蔭で監督々々と呼んでゐた。

不愉快なのは、その日本娘はお茶のお給仕をする役目なのだが、決して日本人の卓子には近寄らせない店則で、西洋人のお客だと、紫矢がすりの着物に唐縮緬の紅い帯を御太鼓に結んだのが、草履をばたばたいはせて働く。日本人のお客には、英吉利娘がお給仕をする仕組なのだ。いふ迄も無く、日本人同志だと、間違が起り易いといふ支配人の意見なのである。人を馬鹿にするなといひ度いところだが、我が郡虎彦君は、此の日本娘の一人におもひを寄せて、毎日々々通つて居たのである。しかし、何分日本人の御給仕はしない定めなのだから、口をきく機会が無い。従て、一人で行つた場合には、到底所在無さに堪へられなくなる。是非とも相手が欲しいわけで、即ち伊藤道雄が其選に當つたのである。

最初はめいめい別の方角に住んでゐたが、大正四年の春には、三邊金造君の見附けた市中の下宿屋に、澤木君も私も、後には小泉君も小林澄兄君も宿をとつた。圖書館へ通ふのに五分とかゝらない位置なのがたゞ一つの取得で、外には何もほめる

點の無い冷酷な下宿屋だつた。此處には郡君もよく遊びに來た。澤木君と三人で、骨牌をするのである。

此の頃の郡君は、全く一日を暮し兼てゐたやうである。夏になつて、澤木君が伊太利の旅に立つてしまふと、外には話相手が無いので、のべつに私の下宿をたづねて來た。二人とも段々氣心がわかつたので、互の我儘を許してつきあへるやうになつた。ひたぶるに氣障な奴だと思つてゐたけれど、話して見ると、在外無邪氣だつた。私は明らかに、その事を彼に話した。郡君は、多くの人がさう思やうに、私をひどくつきあひにくい人間と考へて居たさうである。

彼は引續いて烏龍茶店に通つて、まゝならぬ戀に悩んでゐた。伊藤道雄のかはりに、私を誘ふ事もあつたが、酒の飲めないうちなので、私はなかなか道具には使はれなかつた。

「烏龍茶だけは御免だせ。」

散歩して少し疲れを感じながら、どつちかゞ休息しようと切出すならひを、先づ先手を打つてやると、彼は獨特のほがらかな聲で笑つて、黙つてカフェ・ロオヤルについて來た。しかしいつたん腰を下すと、話は必ず烏龍茶の日本娘の事だつた。

その娘さんは、ほんとに綺麗な、可愛らしい人だつた。顔色が蒼白く冴えないのと、眼がうるんでゐるので、どつちかといへば寂しい方だつた。そんな可愛らしい人を、日本獨逸佛蘭西——到る所であらゆる戀愛をもてあそんで來た、維納の詩人の作中にでも出て來さうな男の手に渡すのは無慘過ると、私は屢々彼にからかつたが、心の中でも、眞實その娘さんの無事を祈つてゐた。

郡君の話では、自分はその清淨な少女によつて救はれ、清められた魂をもつて、兼々自分がこゝろざすところの、世界の文學史上に一大記念塔を建設する仕事にとりかゝるのだと云ふのであつた。詩人の爲に處女を犠牲に捧げなければならぬやうな話である。非常に獨斷的で、氣の弱い相手だと、どうしてもうなづかないでは

かられない情熱をもつた郡君の話振ではあるが、どうも根ざすところは利己的な詩人の空想としか思はれなかつた。

其の頃、殆んど毎日郡君は私の顔を見に來た。下宿に來る事もある。私が圖書館の歸りに必ず立寄るカフェ・ロオヤルに來る事もある。電報を打つて來て、さも急用がありさうなので行つて見ると、何の用事も無く、寂しさに堪へられずに呼んだのだと云ふやうな事もあつた。しめつばい英吉利の秋の郊外の、落葉のかさこそ風に舞ふしき石の上を踏んで行つた心持は、今でもなつかしく思ひ出す事がある。郡君は、見かけに寄らない寂しがりやだつた。

玄關の呼鈴を押すと、獨特の大きな足音をさせて出て來て、大變なつかしさうに握手する。性分として、私は日本人同志握手するのは氣羞しかつた。最初は遠慮して握りかへしてゐたが、しまひにはとても我慢が出來なくなつて、握手はよさうと申出た。郡君は私のそんな性分を、腹をかゝへて笑つた。

郡君は語學の天才で、ろくに習ひもしないらしい獨乙語も佛蘭西語も、日常の會話位は器用に喋るらしく、殊に英語には大分自信を持つて居た。それにひきかへ、私は語學の面白味を感せず、又面白いと思はない事にはちつとも精を出さない性質なので、郡君の宿の主婦など、話をするのは眞平だつた。それで、郡君の宿の客間の扉を閉じて、二人きりで骨牌をした。プラス・マイナスといふ最も通俗なやつだ。一體私は勝負事には相當強い方で、就中骨牌には自信があつた。プラス・マイナスを二人差向ひでやるのなら、大概の人に負けた事が無い。

「僕はこいつなら誰にも負けないんだ。」

といふと、

「僕もこいつ丈は負けた事が無いんだ。」

と郡君も云つた。晝飯を喰べて直ぐ出かけて、夜の更ける迄二人つきりで勝敗を争ふのだつた。五時の御茶を晩飯のかほりにする事もあつた。

「少し休まう。」

と云つて私が長椅子に寝ころがると、郡君は洋琴にむかつて、唱ひながら弾いた。何事にも自信の強い人だつたが、聲樂にも充分自信を持つてゐた。

その家には子供が無くて、愛耳蘭テリアの年をとつたのと、純白の猫が居た。私は生れつき何よりも猫が嫌ひなので、こいつは絶対に室に侵入する事を禁じた。たまたま扉をあけたてする時に忍込んだのを見て血相變へる私の極度の敵意を、郡君はひどく面白がつてゐたが、眞劍にいやがるのだとわかつたので、しまひには私が遊びに行く時は、此の猫を小部屋に監禁してくれた。犬は私も好きだつたけれど、郡君も餘程好きらしかつた。膝の上に乗せて頬邊を擦りつけたり、自分の飲みかけの紅茶をそのまゝ飲ませたりした。私はそれにも屢々抗議を申込んだ。いくら犬が好きでも、私の潔癖は、ひとつ皿の物をわけて喰ふ事を許さなかつたのである。

潔癖といへば、郡君は頗つきの御洒落だつたけれど、一面には甚だ潔癖でなかつ

た。頭の髪に油をこつてり塗つて叮嚀に分け、頬邊には桃色のクリームを塗り、着物も相當氣をつけて居たが、入浴嫌で一箇月も體を洗はず、從而黒羅紗の背廣の背中や肩に、夥しく雲脂をくつつけてゐるやうな事が多かつた。事毎にあらはれる私の潔癖も、彼のほがらかな笑の種となつた。

圖書館に通ふ外に、私は芝居と音樂會にせつせと通つた。郡君は烏龍茶店いつてんばりだつたが、しまひには寂しくて堪らないものだから、私にくつついて方々歩くやうになつた。九月八日の夜も、二人は音樂會に出かけた。第一部の演奏が済んで、暫時休憩の後、第二部に移る番組だつたが、どうしたのかその日はひどく疲れ、静かに音樂を聴いてゐる心持になれなかつた。私は郡君を促して場外に出て、近くのカフェーで休息した。例によつて文學を談じ、又郡君の烏龍茶店の戀をきかされて長々と其處に停滯してゐた。

恰度十時半頃であつたらう、俄に砲聲が聞えた。獨乙のツエペリンが來るといふ噂のしきりだつた頃だから、

「愈々來たかな。」

など、冗談を云つてゐたが、次第に砲聲は高く、且連續して聞え、間もなくカフェーの階上階下、一齊に騒然として、その中に鋭い女の叫聲もまじつた。窓かけを押分けて、冷い硝子に額をつけて見ると、降るやうな星空に探海燈の光が未來派の晝のやうに交錯してゐた。客の中には、その光に照らされた敵の飛行船を認めたといひ出す者もあつた。

爆彈が落ちたといふ噂が急ち廣まつた。同時に町の真中に火の手が上つた。恐怖と昂奮で泣出した客もあつた。いくさだといふのに、呑氣らしく音樂會に行つたり、カフェーに入込んだりしてゐるだらけた氣分が緊張して、痛烈な光景は寧ろ氣持がよかつた。二人はカフェーの戸のしまる迄、其處の二階で、物凄い有様を見てゐた。爆彈の爲めに火事となつた場所は、私の宿の近くだつた。ただ一人歸りの遅い私

を、人々は心配してゐた。

その緊張した心持は決して悪いもので無かつた。郡君は、もう一度あゝいふ事があつて、しかも未だ烏龍茶店の店をしまはない時間だと、地震加藤のやうに馳けつけてやるのだがなあと、屢々繰返してゐた。

十月のなかばには小泉氏も巴里に行つてしまつて、私も寂しくなつた。恰も風邪で寝込んだ郡君から、毎日電報を打つて寄越すので、遙々ウイレスデン・グリーン迄見舞に行つた。床の中に寝て居る彼を相手に、矢張り骨牌をして暮らした。

これよりさき、いろんな身の上話も聞いた。烏龍茶店の娘の事も聞いた。矢張りその娘の事はおもひつゞけてゐて、正式に結婚をするのだと云つてゐた。郡君のおとつさんといふ人は、ほんとは養父なのださうだが、歐洲航路の始めて開けた時代の船長として有名な人で、昔かたぎの一徹者だといふ事だつた。須磨だか明石だかに住んでゐて、天子様が御通過になる時は、それが夜中だらうが、寒中だらうが、

風雨の日であらうが頓着無く、禮服を身につけて沿道に出て奉迎し、息子の虎彦君が家にゐる時なら、無理にも引つれて共々頭を下げさせるといふ質の人ださうである。いかにして此のおとつさんに結婚の許可を得る事が出来るかといふ難問題も、久しく郡君を悩ましたらしい。

ところが、郡君の爲めに大變都合のいゝ人があらはれた。それはその時の歐洲航路の船長である。此の人の船で、烏龍茶店の日本娘達は、遙々運ばれて來たので、船長さん船長さんと叔父さんのやうになつて居る。一方には郡君のおとつさんに頼まれた品物などを持つて、船長さんは郡君をもたづねて來る。遂に此の人をくさびとして、長い問口をきく機會もなく、たゞお茶を飲んで辛抱して居た郡君も、日本娘達と言葉をかはす幸ひを得たのであつた。先づ船長さんの紹介で、日本娘を監督してゐる年増とちかづきになり、船長さんにつれられて、娘達の寄宿してゐる家にも押かけた。もともと何事にも自信が強く、殊に自分の容貌には特別に信賴して

ゐたから、事が此處迄來ると、あとは存外押の一手で、土俵際迄詰めたらしい。

彼は有頂天だつた。當の娘に手紙を渡し、やがて先方からも返事を得た事、監督が氣の利いたおばさんの役を買つて出た事、外の娘達が焼持を起して大騒ぎだといふ事などを、目薬をさしながら幾度繰返したかわからない。

茲に目薬といふのは、郡君は常にポケットに目薬を持つてゐて、人と話をしながら、頻りに之を目にさすのである。

「ほんとに目が悪いのかしら、それもお洒落の一手に過ぎないのぢやないか。」と私がいふと、

「さうかもしれないなあ。」

と答へて笑つた。

島崎藤村先生の「新生」の中に、斯ういふ一節がある、

……きまりで岸本の胸に浮んで來る年若な留學生があつた。ギャラントといふ

言葉をそのまま、宛箴め得るやうな、巴里に滞在中も黄色い皮の手套を集めて居たことがまだ岸本には忘れられずにある青年の紳士らしい風采をしたその留學生……

これを郡君だと云つても差支へないであらう。

……況してその年若な留學生が自己の美貌と才能とを飾るかのやうにその話を始めた時には、彼は獨りで激しい心の苦痛を感せずには居られなかつた。何故、不徳はある人に取つて寧ろ私かなる誇りであつて、自分に取つて斯様な苦惱の種であるのだらう、と嘆いたことさへあつた。

流石に島崎先生の觀察の鋭さと、省察の深さがうかゞはれる。

それとは勿論場合が違ふのだけれど、烏龍茶店の娘の話をする時の郡君は、正に自己の美貌と才能とを飾るかのやうにその話をした。しまひには、監督の年増も亦、自分に御意があるのだときめて居た。

すつかり昂奮しきつた郡君は、引つゞいて私の宿をおとづれて来ては、それからそれと自分の戀の経路と、將來の方針を話した。その外には、矢張り文學を論じあつた。ひと頃はダヌンチオを好み、「道成寺」を書いた頃は、その影響をうけてレトリックの面白さに凝つたが、今はもうそんな事には興味が無い、あらゆる人事を眞正面から觀、且大なる構想精緻なる布置に於て並ぶ者のない沙翁こそ、吾々が曾て有した第一の人間であると云つてゐた。小慟巧に月々幾つとなく小説をつくる日本の文人を罵る事も、極めて雄大な言葉を盡して繰返した。彼の口からはめ言葉を貰つたのは、戯曲演出者としての小山内先生、獨創的ヒュモリストとしての武者小路實篤氏位のものであつた。その外には、その頃の「中央公論」に出た野上彌生女史の「二頭の子馬」——此の題は少々違ふかもしれませんが。違つて居ましたら後日訂正致します。——といふ小説を激稱してゐた。此の作は、私も大變感心して讀んだ。その他の人はみんないけないといつて差支へないであらう。私の如きは、殆んど文

筆の人間としては、郡君の眼中に無かつたやうである。

ミケランヂエロ、シエクスピアと共に、郡君が口を極めて讚美したのは、常陸山谷右衛門である。雄大無比の彼の取口に感心してゐたばかりで無く、その人物に敬服するのだと云つて居た。政治家にも藝術家にも、我國には未だ常陸山程の人間は無いと云つた。自分の話に愈々昂奮して、

「藝術の野に常陸山出でよ。」

などと叫んで、大に笑つた。

郡君は女性的の感じもする、まるみのあるちいさい體だつたが、自分では角力が強いと云つてゐた。

「一番勝負なら大概の奴に負けない自信がある。」

と云つた。いくら手取にしても、あんな貧弱な體格では、唯一突きだらうと思つて、「ようし、それぢやあ一番やつて見やうか。」

と私も郡君なら必ず勝てるといふ確信をもつて應戦しようとしたが、結局之は冗談でおしまひになつて、遂に彼が果して角力が強かつたかどうかは知らずに済んだ。私は元來金にしまりが無く、月の始にまとまつて學資が届くと、最初の二週間位に豪遊してしまつて下半月にひつぱくするやうな遣方だつた。まるつきり金がなくなつて、食事をする事が出来なくなり、小泉君の行くところにくつついて行つて、喰べさして貰つた事もあつた。郡君も亦まるつきりだらしが無かつた。よく私に借りに来た。こつちも困つてゐるので斷る事もあつたが、たまたま貸してやると、どういふ風にして手に入れるものか、久しからずして返しに来る。さうかと思ふと又數日たつて借りに來るといふ有様だつた。

テームス河の向岸のヴィクトリア・ホオルといふので沙翁物をしきりにやつてゐたが、「夏の夜の夢」を二人で見に行つた時、踊子の一人の未だ十三四らしいのが、すぐれて可愛らしく、手足の一舉一動に何ともいへない柔かいしなのあるのに感心

して、チョコレートの大箱を買つて贈り度いと云つたが、二人とも懷中無一物で、ひどく残念がつた事もあつた。此の踊子は良家の御嬢さんで、後日郡君が倫敦で名前を知られるやうになつてから、ちかづきになつて一緒にチョコレートを喰べたさうである。私を羨しがらせようとする郡君の手紙は、大層面白いものだつた。

十二月の中旬に、私は巴里へ向けて倫敦を去る事になつた。郡君はしきりに引止めてくれたけれど、私としては歸國の日も迫つて來たので、いくら引止められても止つてはゐられなかつた。

その頃は郡君は既に健康を害してゐたし、又金が無くて困つてゐた。寄席に出て、でたらめの踊をおどる伊藤道雄の収入を羨んでゐた事もあつた位である。しかし、どういふ傳手を求めたのか、或る金持の女とちかづきになつて、その家に置いて貰つて、専心戯曲制作に努める事が出来るやうになるかもしれないといふ希望ももつてゐた。

又一方には、一時全く夢中になつてゐた烏龍茶店の娘を戀する心持に、たるみが來てゐた。郡君の解釋では、監督の自分に對する戀がつつて來たので、その年増は娘に近づくのを邪魔するやうになり、又烏龍茶店の支配人も氣がついて水をさしたので、當の娘もいつたん此方に心が向きさうになつたのに、些か様子が變つたといふのであつた。しかし私の見るところでは、何かしら自分の心に詩を描き、それを極度迄緊張させて、その緊張の中に日を送つてゐたのが、たまたま藝術愛護者の金持の婦人があらはれ、又倫敦の藝術家達とつきあふ機會が恵まれ始めたので、元來こゝろざしてゐた藝術慾が燃えると同時に、戀愛遊戯にあきて來たのだと思ふのである。私は彼の心に秋風の立つたのを祝した。

「來年中には吃度君を喜ばせるよ。」

と郡君は只管戯曲制作の希望ばかりを口にした。

さうして、ほんとにその金持の女の人の愛護の下に、彼は「王爭曲」を完成した

のである。

翌年の夏迄巴里にゐて、私は八月のなかばに倫敦から出る船に乗つて日本へ歸つた。その時は是非とも倫敦であひ度いと云つて置いたのだつたが、郡君はバトロンの婦人と共に或海岸に行つてゐて歸つて來なかつた。金持の婦人はあらゆる藝術の愛好者で、その家には若い女の詩人もあれば畫家もある。その女詩人が郡君の戯曲の英語を直してくれるのだといふ話だつた。

愈々私が出立する日に、郡君は又葉書を寄越した。

葉書有り難う。

實はやりかけて居た仕事ともかくも君が立たれるまでに一通はすまして謄寫版にした一つを御送りしようと思つて随分急いだのですが一日ばかりのことで間に合はなくなりました。出來ただけとも思つたのですがやつぱりまとめてから上海あてと送りませう。船中で読んで下さい。いろんな事をいふやうですが僕

もやつぱり來年勿々歸る事になるやうです。ともかく御機嫌よう。

なんだ、一度位別れに倫敦迄出て來たつていゝぢやないかと、私は少なからず不平だつた。しかし、いろんな女の人に取巻かれて、日本の若き天才藝術家としてちやほやされてゐる郡君の事を考へると、そのすべての様子が想像の繪となつて浮んで來た。何となく微笑を禁じ得ないものがあつた。

「王爭曲」は上海では受取らなかつた。ずつと後に謄寫版刷のものを送られ、それを何處かの雜誌に出し、且市川左團次一座で上演してくれるやうに骨折つてくれといふ依頼をうけたが、私の力では如何とも出來なかつた。

大正九年に郡君が一寸歸國した時、東京で一番屢々あつたのは私だつたらう。倫敦で大に認められて、空想好の郡君は故國へ歸つた日の盛大なる歓迎をひどく期待してゐたらしかつたが、事實はそれに反したので、すつかり憤慨してしまつた。それに對して腹藏の無い意見を述べ、又「王爭曲」の出來榮にも忌憚の無い批評をし

た私も、たしかに彼を喜ばせなかつた。二日ばかりつづけて夜遅く迄つきあひ、更に日を期して逢ふ約束をしたにも拘らず、郡君はふと東京を去つて、やがて又倫敦に行つてしまつた。

それつきり私とは文通も無くなつた。今此の追憶の文を草しつゝ、私が最も明かにおもひ出すのは、郡虎彦君のほがらかな笑聲である。(大正十三年十一月二十七日)

第三貝殼追放終

大正十四年五月十日印刷
大正十四年五月十五日發行

著者檢印

第三貝殼追放 定價貳圓五拾錢

著者 水上瀧太郎

發行者 內藤加我
東京市小石川區原町十番地

印刷者 高梨知愛
東京市神田區今川小路二ノ一

發行所 東光閣書店
東京市小石川區原町十番地
電話・小石川六七一六番
振替・東京一四七九六番

印刷所 東光閣印刷部
製本所 高木製本所

水上瀧太郎著作目録

處女作	處女作。ものゝ哀れ。ぼたん。うすごほり。嵐。いたづら。	叔山書店
その春の頃	その春の頃。途すがら。沈丁花。	同
心づくし	噂。賢さん。友だち。世の中。心づくし。評議員會。良縁。	同
海上日記	海上日記。船中。同窓。楡の樹蔭。	春陽堂

旅情	汽車の旅。大都の一隅。ベルファストの一日。新嘉坡の一夜。霧の都。	春陽堂
大空の下	俱樂部。火事。大空の下。	同
亞米利加記念帖	紐育リヴァプール。落葉の頃。秋。祭の日。伊太利の女優。ロバートソンの一世一代。ファンニイの處女作。久し振りで芝居を見る記。無名會の「夜の潮」。	國文堂
貝殼追放	新聞記者を憎むの記。八千代集を読む。愚者の鼻息。その春の頃。の序。購書美談。向不見の強身。先生の忠告。「未枯」の作者。兵隊ごっこ。女人崇拜。永井荷風先生の印象。一文。明一週年の辭一を讀みて。「幻の繪馬」の作者。泉鏡花先生と里見弴さん。初夢。此の頃の事。妾の子。	同
日曜	日曜。友情。	同

勤 人	明 窓 集	二第 貝 殼 追 放	大 阪	葡 萄 酒
勤人。喧嘩。邂逅。九月一日。	正月。失職。虫の命。羹。師表。友だち。世の中。嵐。いたづら。	札の辻——櫻田門。余が愛讀の紀行文。秋聲花袋兩氏祝賀會に際し余の感想。戯曲に對する壓迫と國民性。「雪」を見る前後の感想。日曜の痛癢。「新樹」雜感。新劇運動の回顧及び希望。廻船と扇。「御柱」雜感。「第一の世界」雜感。鎌田榮吉先生。赤坂の家。先驅者。素人芝居。世界的。撤水車。	長篇小説。	英京雜記。辻君。水夫の家。隣室の犬。葡萄酒。
プラトン社	大阪毎日新聞社	同	同	東光閣

8

544
96

H

H

終

